

# モノグラフ・高校生'87

vol.21 若者文化 —高校生と大学生の比較—

武藏大学教授 武内 清

千葉大学助教授 明石要一

東京大学大学院生 大野道夫

## 目次

|                               |         |
|-------------------------------|---------|
| はじめに                          | 2       |
| 本報告書の要約                       | 3       |
| 第I章 調査の意図と方法                  | 武内 清 6  |
| 1. 調査の意図                      | 6       |
| 2. サンプルの構成                    | 7       |
| 3. 調査対象者の特性                   | 8       |
| 第II章 若者の行動特性                  | 武内 清 10 |
| 1. ふだんの日の生活時間                 | 10      |
| 2. 1か月の行動経験                   | 14      |
| 3. 休日、お金、もの                   | 18      |
| 第III章 若者の成長スタイル               | 明石要一 21 |
| 1. 味覚は変わるか                    | 21      |
| 2. 若者はいつ怒るか                   | 24      |
| 3. 若者は何に自信をもっているか             | 26      |
| 4. 若者は両親をのり越えたか               | 30      |
| 第IV章 若者文化のタイプ                 | 大野道夫 33 |
| 1. 若者文化の4つのタイプ                | 33      |
| 2. 若者文化のタイプと行動経験              | 40      |
| 3. 若者文化のタイプとグループ・サークル加入       | 41      |
| 4. 若者文化のタイプと高校生・大学生           | 44      |
| 第V章 若者のアイデンティティ形成             | 大野道夫 45 |
| 1. アイデンティティ形成の4つのタイプ          | 45      |
| 2. アイデンティティ形成のタイプと生活時間        | 53      |
| 3. アイデンティティ形成のタイプとグループ・サークル加入 | 54      |
| 4. アイデンティティ形成のタイプと高校生・大学生     | 54      |
| おわりに                          | 56      |
| 資料1 調査票見本                     | 57      |
| 資料2 基礎集計表                     | 71      |

\*おことわり：本文中に使用した写真は本文、テーマとは一切関係ありません。

# はじめに

休日に街を歩いていると、高校生か大学生か働いている青年か、区別がつかないことがある。みな若者として同一のファッショング、購買行動、ライフスタイルを持っているからである。

高校生の中の若者文化の存在を明らかにしようとしたのが本調査のネライである。

方法としては、高校生と大学生の行動や価値観を比較してみた。すると意外というべきか、やはりというべきか、高校生と大学生ではずいぶん意識や行動、そして文化が違っていたのである。

18歳前後は個人の成長の急激な時期であり、高校生と大学生、違って当然とも考えられる。また高校生と大学生の行動に対する人々の期待はたいそう違っており、若者自身もそれを意識して行動を変えているようでもある。

高校まで勉強・子どもらしく、大学に入れば遊び・おとなと同じ、という割り切り方を多くの若者はしている。

「高校生活をふりかえって」の号（モノグ

ラフ高校生vol. 7）で、高校時代にスポーツ、読書、デートなど、ある程度やっておかないと、大学に入ってからでは遅すぎることが多々あると指摘したことがある。

今回の高校生と大学生の意識や行動、文化の違いをどう評価するかは難しいが、日本における高校教育と大学教育の違い、そしてそういう中での若者の成長のプロセスに関する貴重なデータが数多く得られたと思う。

今回は3名の協同執筆であるが、深谷昌志放送大学教授はじめ高校教育研究会のメンバーの方々からは多くのご示唆、ご支援をいただいた。

福武書店教育研究所の加藤智禧所長、島内行夫氏、久保和恵氏、田中美幸氏、藤本かづみ氏には調査の実施から報告書の作成まで大変お世話になった。

最後になったが、今回の調査にご協力いただいた各大学・高校の先生方、学生、生徒諸君に心よりお礼申し上げる。

昭和62年7月1日

武藏大学教授 武内 清  
千葉大学助教授 明石要一  
東京大学大学院 大野道夫

## 本書の執筆分担

武内 清 I章、II章  
明石要一 III章  
大野道夫 IV章、V章

# 本報告書の要約



## 第Ⅰ章 調査の意図と方法

① 本調査は、高校生と大学生の日頃の行動や価値観を比較したものである。

② 高校生から大学生への成長の過程を明らかにするとともに、高校教育および大学教育の効果を評価しようとした。

③ 調査対象は、高校生 2,366 名（普通科 9 校）、大学生 847 名（4 年制大学 7 校、短大 2 校）である。

④ 調査時期は、昭和 61 年 11 月～昭和 62 年 1 月である。

## 第Ⅱ章 若者の行動特性

① ふだんの日、家で勉強した時間は、高校生 1 時間 56 分に対し、大学生 33 分と、大学生の不勉強が目につく。しかし、読書は大学生の方がよくしている（大学生 44 分、高校生 28 分）。

② 外出時間は高校生 40 分、大学生 92 分。アルバイト時間は高校生 4 分、大学生 71 分と、高校生はインドアで過ごす時間が長く、大学

生はアウトドアで過ごす時間が長い。

③ 1か月の行動経験を因子分析にかけると、高校生は「友人と街へ」「デート」「仲間と逸脱行動」「ナンパ」「ゲーム」「音楽」の 6 項目が、大学生は「デート」「友人とのつきあい」「くるま・バイク」「音楽」「ゲーム」「ナンパ」という 6 つの因子が析出された。

④ 友人とのつきあいの仕方が、高校生と大学生では大きく違っている。高校生は友人といっしょにショッピング、ファーストフードの店に入るのが主であるが、大学生になると喫茶店に入り、酒を飲み、友人の家に泊まるなどつきあいが深くなる。

⑤ 高校生は大学生と比べ、勉強以外は経験がきわめて乏しい。高校生が大学生に比べ経験の少ないのは特に、「アルバイト」「友人と喫茶店に入る」「友人と酒を飲む」「車の運転」「デート」である。

⑥ 休日の行動も、家でのんびり過ごす高校生に対して、アウトドアで活動する大学生というあざやかな対比がある。

⑦ 1か月に自由に使えるお金は、平均で高校生5,225円、大学生23,793円と約5倍の差がある。これは行動経験の差とも対応している。

⑧ 大学生の「もの」所有率は高く、高校生の1.2倍多い。しかしパソコン、CDなどハイテク機器は高校生の方にいち早く所有されている。

### 第III章 若者の成長スタイル

① 高校生は大学生に比べて、好き嫌いが多く、刺激の強い香辛料（ワサビ、からし）をさける。飲み物では男子学生は大学、高校ともコーヒー党、女子大学生は紅茶党になる。女子高校生は「パフェ」を好む。

② 高校生が怒る（カッカする）のは、親への不信や政治家の汚職、それから学校の理由なき規制である。彼らの怒る基準は「善一悪」である。一方、大学生は車にキズつけられる、アルバイトを突然クビになる、それからカンニングで不利益をこうむることなどが原因で怒る。つまり、「利益一不利益」が基準となる。

③ 高校生の社会生活の自信は、三つに分けられる。「ひょうきん因子」、「自力因子」「家事能力因子」である。大学生の自信は、それらの因子が分かれて、「一人旅因子」「オ

ピニオン因子」「交際因子」「援助因子」「親ばなれ因子」の5つの因子になる。大学生になると、自信の輪が広がり自分らしさを發揮できるチャンスを多く持つ。

④ 高校生も大学生も親のパワーに接近できることではないことでは同じである。若者の成長の課題である親をのり越えるのは無理なようだ。

今の若者の成長スタイルは、親とのかかわりをさけて通る、自我形成である。

### 第IV章 若者文化のタイプ

① 若者文化をタイプ分けすると「シリアルエンジョイ」「形式志向一実質志向」の2つの軸によって、「おもい」（形式・シリアル）、「けばい」（形式・エンジョイ）、「かるい」（実質・エンジョイ）、「しぶい」（実質・シリアル）という4つの若者文化が分類される。

② 行動経験でみると日記は「おもい」、ナンバは「けばい」、友人とのつきあいは「かるい」、アルバイトは「しぶい」若者文化と結びついている。

③ 「仲のよいグループ」は「かるい」若者文化に、部・サークルは「おもい」若者文化に結びついている。

④ 若者は高校生から大学生になるにつれて「エンジョイ」から「シリアル」へ、「形式志向」から「実質志向」へ移行する傾向が

## 本報告書の要約



ある。つまり「けばい」から「しぶい」若者文化に移行する。このように大学生においても、それなりの自己変革はみられる。

### 第V章 若者のアイデンティティ形成

① 若者のアイデンティティ形成を分析すると「モラトリアム—アイデンティティ」「自我(エゴ)—相互性」の2つの軸によって「孤立型モラトリアム」、「自立型アイデンティティ」、「ふれあい型アイデンティティ」、「拡散型モラトリアム」という4つのタイプがみられる。

② 生活時間との関連をみると、テレビは「孤立型」、マンガ・雑誌は「拡散型」、勉強・新聞は「自立型」、アルバイト・外出は「ふ

れあい型」とかかわりがある。

③ 「仲のよいグループ」と部・サークルに参加している若者はともに「ふれあい型」アイデンティティを形成している。

④ 若者は高校生から大学生になるにつれて「モラトリアム」から「アイデンティティ」へ、「自我(エゴ)」から「相互性」へ移行し、「ふれあい型アイデンティティ」を形成する。このように「ふれあい型アイデンティティ」は、現代のアイデンティティの重要なタイプである。

⑤ このような高校生と大学生の違いは年代(発達)の違いであると同時に日本の高校教育と大学教育の違いを反映している。

#### 【調査概要】

対象●東京、千葉、名古屋、広島、  
神奈川、福岡、山形の高校  
生と大学生

期間●昭和61年11月～62年1月

方法●学校通しによる質問紙調査

#### サンプル数

|  | サンプル数 |       |      |       |       |       |       |
|--|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|
|  | 3,213 | 2,366 | 847  | 1,575 | 353   | 760   | 490   |
|  | 32.3  | 44.3  | 31.8 | 28.3  | 33.7  | 55.5  |       |
|  | 53.2  | 32.3  | 50.2 | 40.8  | 59.9  | 26.3  |       |
|  | 12.3  | 19.2  | 15.7 | 25.8  | 5.1   | 14.7  |       |
|  |       | 2.2   |      | 2.5   |       | 2.0   |       |
|  | 60.0  | 66.7  | 41.7 | 100.0 | 100.0 | 0.0   | 0.0   |
|  | 38.9  | 32.1  | 57.8 | 0.0   | 0.0   | 100.0 | 100.0 |

回収数以外の数字は%  
無回答・不明は省略している

# 第Ⅰ章 調査の意図と方法



## 1. 調査の意図

昭和60年現在、大学・短大進学率は37.6%と、10人に4人は大学・短大に進学している。

「大学に入って何をしたいか」という高校生に対する質問に、アメリカの高校生は「職業に役立つ資格や技術を身につけたい」(9割)と考えているのに対し、日本の高校生のその回答は6割と少なく、「趣味やスポーツに打ち込みたい」(4割)「のんびり過ごしたい」(3割)という回答が多い(日本青少年研究所『日米高校生比較調査』1979年)。日本の高校生は、受験競争の疲れを大学に入りていやしたいと考えているのである。

日本的小中高生はよく勉強、大学生は不勉強といわれ(「朝日新聞」1987年1月5日)、レジャーランド化した大学に対し、日本の大教育の現状を憂える声が強い。

はたして上記の指摘は正しいのであろうか。つまり日本の初等中等教育は成功、高等教育は失敗といえるのであろうか。遊び中心の大学生と対照的な、勉強中心の高校生の行動や価値観、そしてそれを支える日本の高校教育に問題はないのであろうか。

教育の評価は、知的側面だけでなく人格や行動も含めた全体的な観点からなされねばならない。また教育者の意図しない装置(潜在的カリキュラム)も教育の場には埋め込まれていて、一定の教育効果を生んでいる。その点に関する考察もなされる必要がある。

本調査では、高校生と大学生の日頃の行動や価値観を比較することで、上記の疑問を解いてみたい。

日本の高校と大学はどのような教育効果を

生んでいるのか。高校から大学に進む過程で、若者たちはどのような意識や価値観の転換を

とげるのか。その背後にある教育のあり方や若者文化のあり方ともからめて検討したい。

## 2. サンプルの構成

上記のような調査意図にもとづき、調査対象を高校生と大学生とした。

調査地点として、首都圏、山形、名古屋、広島、福岡の5地点を選び、それぞれの地点の大学・短大の学生と、そこに進学する高校の生徒を調査対象とした。

調査対象校は、大学・短大9校、高校9校、

合わせて18校である。

地点別にみると、首都圏では大学4校、短大1校、高校5校、山形では大学1校、高校1校、名古屋では短大1校、高校1校、広島では大学1校、高校1校、福岡では大学1校、高校1校である。詳しいサンプル構成は、表I-1に示したとおりである。

表I-1 調査対象校の特性とサンプル数  
——数字は実数(属性不明は省略)——

| 学校番号                  | 学校種 | 国公私別 | 所在地 | 全 体   | 性 別   |     | 学 年 別 |       |     |       |
|-----------------------|-----|------|-----|-------|-------|-----|-------|-------|-----|-------|
|                       |     |      |     |       | 男子    | 女子  | 1年    | 2年    | 3年  | 4年    |
| 大<br>学<br>・<br>短<br>大 | 01  | 短 大  | 私   | 名古屋   | 97    | 0   | 95    | 93    | 1   | —     |
|                       | 02  | 大 学  | 私   | 広 島   | 98    | 55  | 43    | 25    | 21  | 38 12 |
|                       | 03  | 大 学  | 私   | 神奈川   | 104   | 38  | 66    | 44    | 60  | 0 0   |
|                       | 04  | 大 学  | 私   | 福 岡   | 104   | 94  | 10    | 51    | 40  | 7 2   |
|                       | 05  | 短 大  | 私   | 千 葉   | 119   | 0   | 118   | 117   | 0   | —     |
|                       | 06  | 大 学  | 私   | 東 京   | 88    | 42  | 46    | 44    | 30  | 12 0  |
|                       | 07  | 大 学  | 国   | 千 葉   | 136   | 71  | 64    | 0     | 102 | 31 2  |
|                       | 08  | 大 学  | 国   | 山 形   | 64    | 21  | 43    | 0     | 20  | 40 3  |
|                       | 09  | 大 学  | 国   | 東 京   | 37    | 32  | 5     | 0     | 0   | 35 0  |
| 大 学・短 大 計             |     |      |     | 847   | 353   | 490 | 374   | 274   | 163 | 19    |
| 高<br>校                | 10  | 高 校  | 公   | 広 島   | 424   | 228 | 193   | 0     | 414 | 0 —   |
|                       | 11  | 高 校  | 公   | 福 岡   | 452   | 445 | 0     | 86    | 188 | 173 — |
|                       | 12  | 高 校  | 公   | 山 形   | 471   | 300 | 156   | 234   | 216 | 0 —   |
|                       | 13  | 高 校  | 公   | 名古屋   | 120   | 80  | 39    | 0     | 1   | 117 — |
|                       | 14  | 高 校  | 公   | 千 葉   | 221   | 137 | 83    | 86    | 133 | 0 —   |
|                       | 15  | 高 校  | 公   | 千 葉   | 220   | 139 | 80    | 133   | 87  | 0 —   |
|                       | 16  | 高 校  | 公   | 神奈川   | 280   | 140 | 140   | 140   | 139 | 0 —   |
|                       | 17  | 高 校  | 公   | 神奈川   | 90    | 57  | 32    | 41    | 40  | 0 —   |
|                       | 18  | 高 校  | 公   | 神奈川   | 88    | 49  | 37    | 45    | 41  | 0 —   |
| 高 校 計                 |     |      |     | 2,366 | 1,575 | 760 | 765   | 1,259 | 290 | —     |

### 3. 調査対象者の特性

有効回答数は、高校生2,366名、大学・短大生（以下大学生と略記）847名である。

調査対象者の基本的特性は以下のとおりである（数字はパーセント）。

#### 1. 学校種別

| 高校生  | 大学生  |
|------|------|
| 73.6 | 26.4 |

#### 2. 学年別

|     | 1年   | 2年   | 3年   | 4年  | 不明  |
|-----|------|------|------|-----|-----|
| 高校生 | 32.3 | 53.2 | 12.3 | /   | 2.2 |
| 大学生 | 44.3 | 32.3 | 19.2 | 2.2 | 2.0 |

#### 3. 性別

|     | 男子   | 女子   | 不明  |
|-----|------|------|-----|
| 高校生 | 66.7 | 32.1 | 1.2 |
| 大学生 | 41.7 | 57.8 | 0.5 |

#### 4. 通学形態別(大学生のみ)

|     | 自宅   | 自宅外  | 不明  |
|-----|------|------|-----|
| 全 体 | 60.0 | 39.1 | 0.9 |

#### 5. 進路希望別(高校生のみ)

| 就業  | 各専<br>種修<br>学校 | 短<br>大 | 4<br>年<br>制私<br>立<br>学 | 4<br>年<br>制国<br>立<br>学 | その<br>他 | 決<br>め<br>て<br>い<br>な<br>い | 不<br>明 |
|-----|----------------|--------|------------------------|------------------------|---------|----------------------------|--------|
| 1.1 | 0.5            | 1.6    | 3.3                    | 19.1                   | 68.4    | 1.0                        | 4.4    |

#### 6. 高校時代の成績

|     | 上    | 中の上  | 中    | 中の下  | 下    | 不明  |
|-----|------|------|------|------|------|-----|
| 高校生 | 6.4  | 24.3 | 31.3 | 19.1 | 14.3 | 4.6 |
| 大学生 | 12.0 | 35.6 | 29.5 | 14.5 | 5.4  | 3.0 |

男女比は、高校生では7：3と男子が多く（男子1,575名、女子760名）、大学生は4：6と女子が多い（男子353名、女子490名）。したがって、男女差のある項目は男女別に高校生と大学生を比較する必要がある。

学年は、高校生、大学生とも1、2年が8割を占める（1、2年の割合、高校生85.5%、大学生76.6%）。したがって高校生と大学生の年齢差は2～4歳（浪人すると3～5歳）である。

高校生の進路希望は、4年制大学が87.5%（国公立68.4%、私立19.1%）ときわめて高い。短大3.3%（女子10.0%）を含めると大学・短大進学希望が9割を越える。これは日本の平均よりはるかに高率で、今回の調査対象校として進学校を選んだためである。したがって以下でみる高校生のデータは、日本の高校生の平均値を示すのではなく、大学・短大に進

学を希望する高校生のデータとしてみる必要があろう。

また高校時代の学内の成績は、高校生より大学生の方が多少高い。このことは高校格差を考慮に入れて考えると、調査対象になった高校生の通う高校が、調査対象になった大学生の出身高校より多少偏差値が高いことを示す。いわゆる最難関国公立大、私立大学が今回の対象校に含まれていないのも上記のような傾向を生じた所以である。今回の大学生のデータは、日本の大学生の平均値に近いと思われる。

しかし、上記のようなサンプルの偏りは、高校生と大学生の行動や価値観を比較する上では障害とはなっていない。以下示すデータは、日本の高校生と大学生の一般的な差違を示すものと考えてよいであろう。

## 第II章 若者の行動特性



本章では、高校生と大学生のふだんの日の生活時間、1か月の行動経験、休日の過ごし方、お金、持っているもの、について検討す

る。詳細なデータ(特に学校種×性別)は巻末の基礎集計表を参照されたい。

### 1. ふだんの日の生活時間

#### (1) 家での勉強時間

高校生と大学生に、ふだんの日の主な生活時間をたずねた結果が、図II-1である。

家の勉強時間からみてみよう。家の勉強時間は、高校生に比べ大学生はきわめて短い。

家の平均勉強時間は、高校生1時間56分、

大学生33分と3倍の差がある。

ふだん2時間以上家で勉強するものは高校生の6割強に対し、大学生では1割強とわずかである。また「ほとんどしない」は高校生1割強に対し、大学生は6割弱と多い。6割の大学生が、家で勉強することが皆無というのは、学生という言葉を返上したくなる数字である。

大学生も年1~2回の学期末の試験前は多少

勉強はしている。しかし高校生は試験前はもっと勉強しているであろうから、日本の大学生の不勉強は歴然としているといえよう。

## (2) テレビ視聴時間

3時間以上のテレビ視聴は、高校生の15.1%に対し、大学生は24.4%と大学生の方に多少多い。またほとんどテレビをみないという層も高校生の12.0%に対し、大学生の17.4%と大学生の方に多い。

平均では、高校生1時間36分、大学生1時間43分と大差はない。

大学生では、自宅外から通うものが4割いて、下宿で1人の時テレビを見ることが多い（自宅外生の平均1時間48分、自宅生1時間41分）。

## (3) 新聞、雑誌、読書

新聞を読む時間は、高校生36分に対し、大学生46分と多少大学生が多い（「ほとんど新聞を読まない」は高校生51.7%、大学生47.1%）。

マンガ、週刊誌、軽い雑誌を読む時間は平均で、高校生43分、大学生46分と大差はない。

また読書をする時間は、高校生28分（男子18分、女子32分）に対して、大学生は44分（男子41分、女子45分）と大学生が多い。ほとんど読書をしないは、高校生62.0%に対し大学生は43.3%と少ない。

全国大学生協の調査（1983年）によれば本を読むのが好きという大学生は52.7%（「まあ好き」もあわせると87.9%）、読書は「自分の考えをつくり出していく」（29.6%）「知的好奇心をみたす」（19.5%）、「楽しい」（13.6%）と考え、印象に残った本のジャンルは「日本の現代小説」（19.1%）、「SF・推理」（14.8%）「哲学、思想、心理」（10.1%）がベスト3（『大学生の読書生活』全国大学生協1984年）。

これらの結果から、大学生たちは家では勉強をしないとはいって、好きな本を読む割合は高校生より多くなっている。

## (4) 外出（外での遊び、ショッピング、友人宅訪問）

「外出をほとんどしない」のは、高校生の65.7%に対し、大学生は27.6%。「1時間くらい」外出は、高校生18.2%、大学生31.7%、「2時間以上」は、高校生15.6%、大学生40.3%と大学生はよく外出している。

外出時間の平均は、高校生40分、大学生1時間32分と約2倍の差がある。家（インドア）に籠り非活動的な高校生に対し、大学生は外出好きで活動的である。

インドア時間の長い日本の高校生に比べ、アメリカの高校生がアウトドアで過ごす時間はきわめて長かった（2時間以上78.1%、平均2時間35分、前掲『日米高校生比較調査』）。日本の大学生がアウトドアで過ごす時間は、アメリカの高校生のそれに近づいている。

## (5) アルバイト

一般に日本では高校生がアルバイトすることに対し学校が禁止する（特別の場合は許可）ことが多い。したがって、アルバイトをしている高校は2.6%とごくわずかである。

それに対して、ふだんアルバイトをする大学生は45.5%（男子42.2%、女子47.6%）と、約半数に達する。

アルバイトは大学生の社会体験を広げ、経済観念も変える。大学生は、アルバイトによって「社会のさまざまな面を知った」（4割）、「お金を得るむずかしさを知った」（3割）、「職業選択の参考になった」（1割）としている。（『現代大学生の意識と行動——武藏大と5大学・1短大の比較——』1982年）

以上、ふだんの日の生活時間の主な行動をみてきた。高校生はあまり外を出歩かず、勉強をよくし、家にいて静かな生活を送っている。それに対し大学生になると、高校時代の鬱積を晴らすように、アウトドアへと活動の場を移す。その分勉強時間は少なくなる。

次節でみると、大学生になると「友人

と喫茶店に入る」「友人と酒を飲む」「友人の家に泊まる」「デートをする」「アルバイトをする」など、アウトドアでの友人、異性との交友関係が広がり、社会体験に多くの時間を費やすようになる。

高校生に比べ大学生は外からの強制が少な

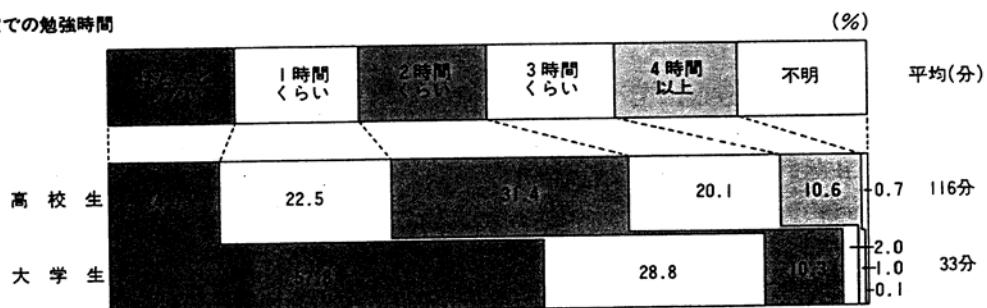
く、自分の好みで時間的配分やライフスタイルをかたちづくることができるのである。

高校時代に家で勉強、大学時代に外で活動というパターンは、日本の若者の行動様式として定着している。

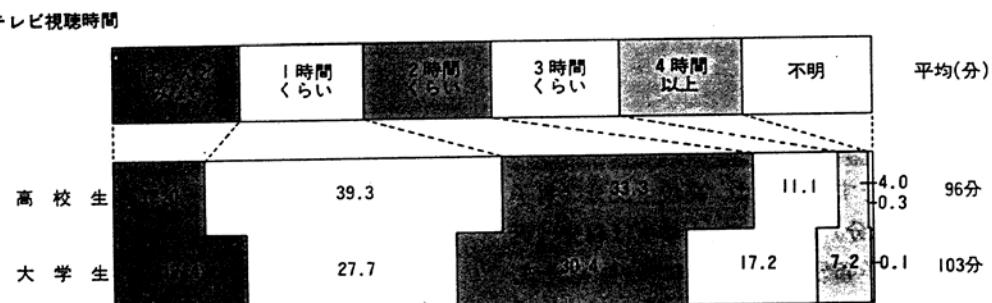
高校生に対しては、もう少しアウトドアで

図II-1 ふだんの日の生活時間

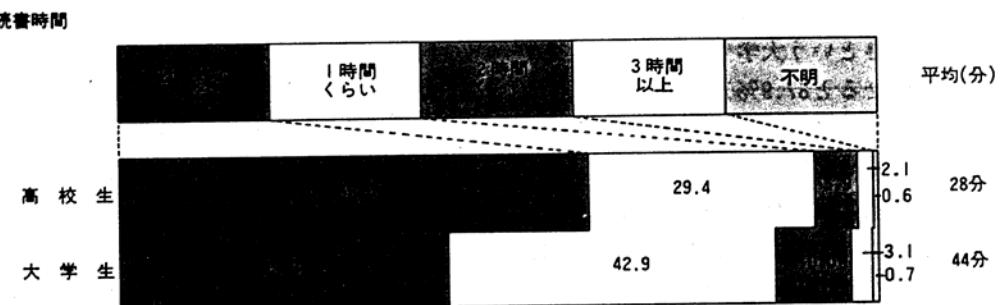
A 家での勉強時間



B テレビ視聴時間



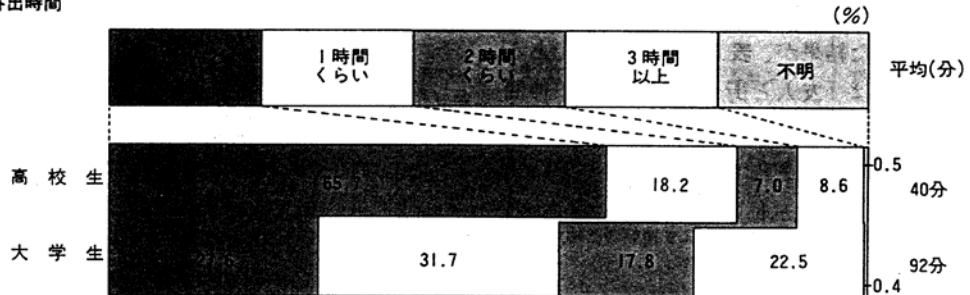
C 読書時間



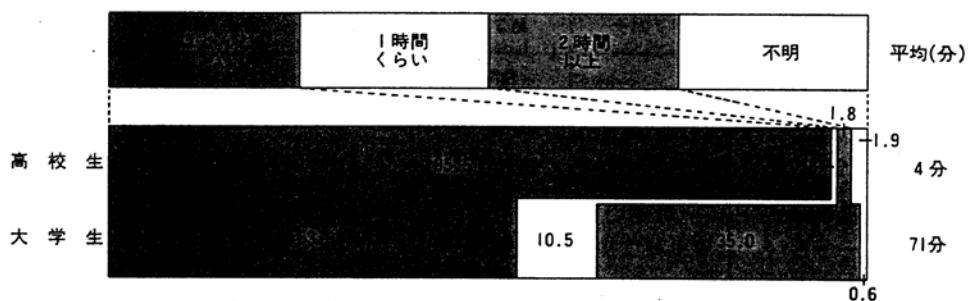
交友関係、社会体験を深めるようすすめたい。それは「高校時代にやりたいこと、やるべきことをある程度やって、自分の能力・関心を啓発しておかないと、大学に入ってからでは遅すぎることが多々ある」という『モノグラフ

高校生 vol. 7 (1982年)』の実証的データによる。大学生に対しては、学生という言葉に恥じないよう、もう少しインドアで勉強あるいは読書するようすすめるのが順当であろう。

F 外出時間



G アルバイトの時間



\* C、D省略(基礎集計表参照)

## 2. 1か月の行動経験

### (1) 行動経験の分類

「あなたはこの1か月次のような行動をしましたか」と23項目にわたって、日頃の行動の経験を質問をした。

その回答を、高校生と大学生の別々に因子分析にかけた結果が、表II-1、表II-2である。

高校生では「友人と街へ」「デート」「仲間と逸脱行動」「ナンパ」「ゲーム」「音楽」の6つの因子が析出されている。

大学生では「デート」「友人とのつきあい」

「くるま、バイク」「音楽」「ゲーム」「ナンパ」という6つの因子が析出されている。

同じ因子に入った行動群は、同質のものとして、回答した生徒たちに認識されていることを示す。たとえば「ナンパ因子」(高校生の第4因子、大学生の第6因子)をみると、「ディスコにいく」ということと「見知らぬ異性に声をかける」という行動は類似した行動として、生徒に受け取られ、「ナンパ因子」としてくくられるのである。

表II-1 高校生の行動経験の分類(因子分析による)

| 因子名                    | 第1因子                  | 第2因子                  | 第3因子                         | 第4因子                   | 第5因子              | 第6因子 |
|------------------------|-----------------------|-----------------------|------------------------------|------------------------|-------------------|------|
| 友人と街へ                  | デート                   | 仲間と逸脱行動               | ナンパ                          | ゲーム                    | 音楽                |      |
| ファーストフードの店に入る<br>0.549 | 彼(彼女)と長電話をする<br>0.751 | 友人と酒を飲む<br>0.655      | ディスコにいく<br>0.538             | ゲームセンターへいく<br>0.613    | 楽器を演奏する<br>0.618  |      |
| 街へショッピングへ<br>0.528     | デートをする<br>0.661       | 友人の家に泊まる<br>0.528     | 見知らぬ異性に声をかける(かけられる)<br>0.343 | マージャン・トランプをする<br>0.416 | コンサートにいく<br>0.279 |      |
| 友人と喫茶店に入る<br>0.504     |                       | オートバイ・バイクに乗る<br>0.349 | アルバイトをする<br>0.213            |                        |                   |      |

(数字は因子得点、各変数がどの程度その因子の性質と関連があるかを示す)

表II-2 大学生の行動経験の分類(因子分析による)

|            | 第1因子                 | 第2因子  | 第3因子              | 第4因子                | 第5因子                   | 第6因子                         |
|------------|----------------------|---|-------------------|---------------------|------------------------|------------------------------|
| 因子名        | デート                  | 友人とのつきあい  | くるまバイク            | 音楽                  | ゲーム                    | ナンバ                          |
| 因子を特徴づける変数 | デートをする<br>0.815      | 友人と酒を飲む<br>0.533<br><br>友人の家に泊まる<br>0.385<br><br>友人と喫茶店に入る<br>0.305 | 車の運転をする<br>0.529  | コンサートにいく<br>0.594   | マージャン・トランプをする<br>0.531 | 見知らぬ異性に声をかける(かけられる)<br>0.540 |
|            | 彼(彼女)に長電話する<br>0.572 | オートバイ・バイクに乗る<br>0.495   | 楽器の演奏をする<br>0.523 | ゲームセンターへいく<br>0.481 | ディスコにいく<br>0.430       |                              |

(数字は因子得点、各変数がどの程度その因子の性質と関連があるかを示す)

## (2) 高校生と大学生の行動パターンの違い

高校生と大学生の因子の出方の違いは、高校生と大学生の行動のパターンの違いを示すものと考えられ、興味深い。

高校生と大学生で同一の因子は「デート」「ナンバ」「ゲーム」「音楽」の4つである。後にみるように、これらの因子に分類された行動の頻度は、高校生と大学生で違っているが、これらの行動に対する同じような意味づけが、高校生にも大学生にもなされているということを意味する。

一方、4つの因子は高校生と大学生で違っている。ひとつずつみていく。

まず、高校生の「友人と街へ」(第1因子)と大学生の「友人とのつきあい」(第2因子)は、その内容が微妙に異なっている。それは高校生大学生それぞれの友人とのつきあいの特質をあらわしていると考えられる。

高校生の友だちづきあいは、街へいってショッピングしたり、ファーストフードの店に入ったり、せいぜいしても喫茶店に入る行為が主な行動となる(高校生第1因子)。

それが大学生になると、友だちとのつきあいは、喫茶店で話すこともあるが、さらに、いっしょに酒を飲む、友人の家に泊まると関係がさらに親密になる(大学生第1因子)。

高校生で友人と酒を飲むや友人の家に泊まるは、高校生らしさから逸脱した行動とみなされる。その証拠に、これらの行動をとる高校生は、学校で禁止されているオートバイ・バイクに乗る、アルバイトをする高校生でもあることがわかる(高校生第3因子)。

大学生のみ特有にみられる行動は車の運転で、オートバイ・バイクへの関心とも結びついている(大学生第3因子)。先にみたように、高校生のオートバイ・バイクへの関心は、友人の家に外泊、アルバイト、酒といった高校生には禁止された逸脱的な行動への親近性と結びついている。

このように、若者が酒、バイク、友人宅への外泊など、同じ行動をとっても高校生と大学生では違った意味を持つことがわかる。大人として扱われる大学生にとって、酒、バイク、外泊はノーマル、一方未成年として扱われる高校生にとって、それらの行動は社会規範か

らの逸脱として判定される。高校生自身もそれを自覚している。

### (3) 高校生と大学生の行動の差

表II-3は、大学生の行動経験の因子名ごとに、個々の行動の差を高校生と大学生で(男女差も含め)みたものである。

22項目中、大学生より高校生の行動の頻度が高いのは、「マージャン・トランプをする」(高校生45.1%、大学生との差18.3%、以下同じ)「予備校や各種学校に通う」(13.7%、差9.4%)「レコードを借りる」(35.0%、差7.6%)「ゲームセンターへいく」(23.2%、差7.3%)の4項目のみである。

ほぼ同率が、「楽器の演奏をする」(34.5%、差3.2%)「スポーツをする」(80.3%、差0.7%)の2つである。

残りの16項目(全体の4分の3)が、高校生より大学生の方が行動の頻度が高い。高校生との差の大きい順にベスト8をあげれば  
1位 アルバイトをする(大学生63.0%、高

校生との差54.1%、以下同じ)

2位 友人と酒を飲む(63.7%、差52.0%)

3位 友人と喫茶店に入る(85.9%、差49.0%)

4位 車の運転をする(41.3%、差41.3%)

5位 デートをする(34.6%、差26.8%)

6位 オートバイ・バイクに乗る(33.5%、差25.5%)

7位 彼(彼女)に長電話する(31.9%、差22.5%)

8位 友人の家に泊まる(39.3%、差27.2%)

アルバイト、酒、友人、デート、くるま、外泊など、高校生に比べ大学生の社会体験、友人関係、行動範囲が、きわめて広くかつ深くなっていることがわかる。

このように大学生が社会体験や人間関係を広め深めることは、大学生の人格形成によい効果を生んでいることと思われる。暗に大学や社会も大学生にそれを期待し、大学生に拘束を少なくし自由な時間を多く与えている。これは一種の大学における潜在的カリキュラムといってよいであろう。

表II-3 高校生と大学生の行動経験の差

(数字は1か月にした割合)

(%)

| 因子名          | 項目                      | 全 体  |        | 男 子  |        | 女 子  |        |
|--------------|-------------------------|------|--------|------|--------|------|--------|
|              |                         | 高校生  | 大学生    | 高校生  | 大学生    | 高校生  | 大学生    |
| 異性と<br>デート   | デートをする                  | 7.8  | < 34.6 | 7.4  | < 31.7 | 8.7  | < 36.7 |
|              | 特定の彼(彼女)と長電話する          | 9.4  | < 31.9 | 8.8  | < 26.1 | 10.5 | < 36.1 |
| 友人との<br>つきあい | 友人と酒を飲む                 | 11.7 | < 63.7 | 13.7 | < 72.2 | 7.5  | < 58.2 |
|              | 友人の家に泊まる                | 12.1 | < 39.3 | 13.3 | < 49.0 | 8.8  | < 32.4 |
|              | 友人と喫茶店に入る               | 36.9 | < 85.9 | 25.0 | < 77.9 | 61.6 | < 91.6 |
| 自動車<br>バイク   | 車の運転をする                 | —    | 41.3   | —    | 55.8   | —    | 31.0   |
|              | オートバイ・バイクに乗る            | 8.0  | < 33.5 | 10.4 | < 52.1 | 2.9  | < 20.2 |
| 音 楽          | コンサート・リサイタルにいく          | 12.9 | < 22.7 | 10.5 | 15.3   | 17.9 | < 28.0 |
|              | 自分で楽器の演奏をする             | 34.5 | 37.7   | 25.8 | > 20.1 | 53.2 | 50.2   |
| ゲーム          | マージャン・トランプをする           | 45.1 | > 26.8 | 46.3 | > 38.0 | 43.3 | > 18.8 |
|              | ゲームセンターへいく              | 23.2 | > 15.9 | 32.4 | > 28.9 | 3.4  | < 6.7  |
| ナンバ          | 見知らぬ異性に声をかける<br>(かけられる) | 9.0  | < 21.0 | 6.5  | < 12.5 | 14.1 | < 26.9 |
|              | ディスコへいく                 | 1.4  | < 12.5 | 1.3  | < 7.4  | 1.7  | 16.1   |
| 街 へ          | 街へショッピングにいく             | 73.2 | < 85.4 | 64.7 | < 76.8 | 90.1 | 91.6   |
|              | ファーストフードの店に入る           | 55.3 | < 75.8 | 48.1 | < 67.4 | 70.5 | < 81.8 |
| その他          | 映画をみにいく                 | 22.1 | < 29.5 | 21.0 | < 30.3 | 24.6 | < 29.0 |
|              | スポーツをする                 | 80.3 | 79.6   | 79.9 | 84.7   | 80.9 | 76.3   |
|              | アルバイトをする                | 8.9  | < 63.0 | 7.1  | < 61.2 | 12.6 | < 64.3 |
|              | 日記をつける                  | 14.2 | < 26.0 | 4.5  | < 11.0 | 34.7 | 36.5   |
|              | レコードを借りる                | 35.0 | > 27.4 | 39.2 | 35.7   | 26.1 | 21.4   |
|              | 友人とけんかをする               | 7.1  | < 14.9 | 6.9  | < 14.7 | 7.6  | < 15.1 |
|              | 予備校や各種学校へいく             | 13.7 | > 4.3  | 13.2 | > 4.0  | 14.9 | > 4.5  |

### 3. 休日、お金、もの

#### (1) 休日の過ごし方

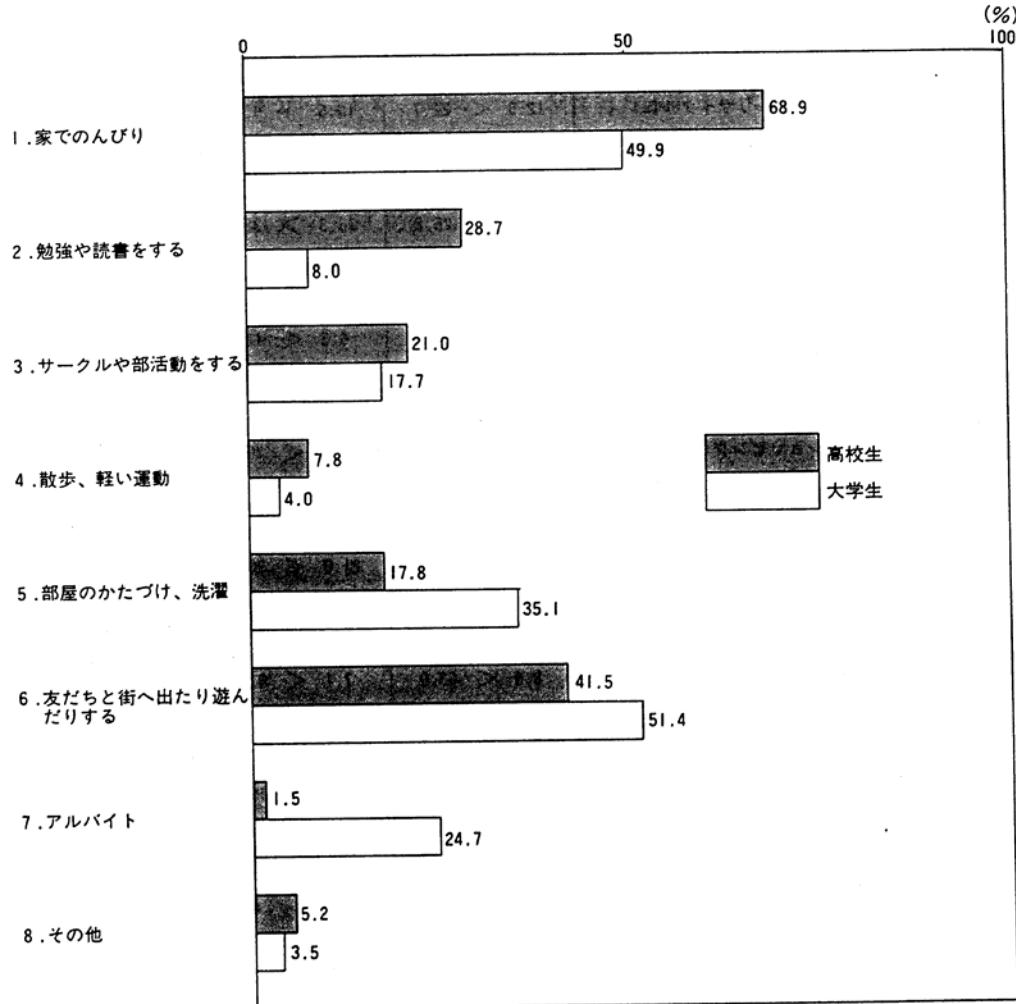
休日の過ごし方の高校生と大学生の差をみたのが図II-2である。

先にみた行動の経験差と同じような傾向——高校生はインドアで非活動的、大学生はアウトドアで活動的——が、休日の過ごし方にもはっきりあらわれている。

つまり高校生に多い休日の過ごし方は、「日頃の疲れを休めるため、家でのんびり過ごす」(高校生7割、大学生5割)、「勉強や読書をする」(高校生3割、大学生1割)の2つである。

一方大学生に多いのは「友だちといっしょに街に出たり、遊んだりする」(大学生5割、高校生4割)、「アルバイトをする」(大学生

図II-2 休日の過ごし方(主なもの2つ)



24.7%、高校生 1.5%）である。また大学生では、休日に「部屋のかたづけ、洗濯、家の手伝いをする」ものも多い（大学生 35.1%、高校生 17.8%）。これは自宅外生もいる（4割）せいであろう。

## (2) お 金

毎月自由に使えるお金（生活費を除く）は平均では、高校生は 5,225 円、大学生は 23,793 円と、約 2 万円弱（5 倍弱）の差がある。「4 万円以上」と高額なのは大学生の 16.8%、高校生の 0.9% である（図 II-3）。アウトドアでの行動の差が、この小遣いの差にあらわれている。

ファッションや化粧品に 1 か月にかけるお金は、平均で高校生 3,557 円、大学生 7,947 円と大学生の方が 4,000 円以上多く（2.2 倍）かけている。今の大学生はたいへんオシャレである。

男女別にみると、女子では大学生 9,315 円、高校生 4,008 円と 5,000 円以上の差（2.3 倍）があり、男子でも大学生 5,766 円、高校生 3,275 円と 2,500 円弱の差（1.8 倍）があり、大学生は男女ともファッションに気を遣いお金を使うようになる。

## (3) 「もの」の所有率

現在の若者は多くの「もの」に取り囲まれ、

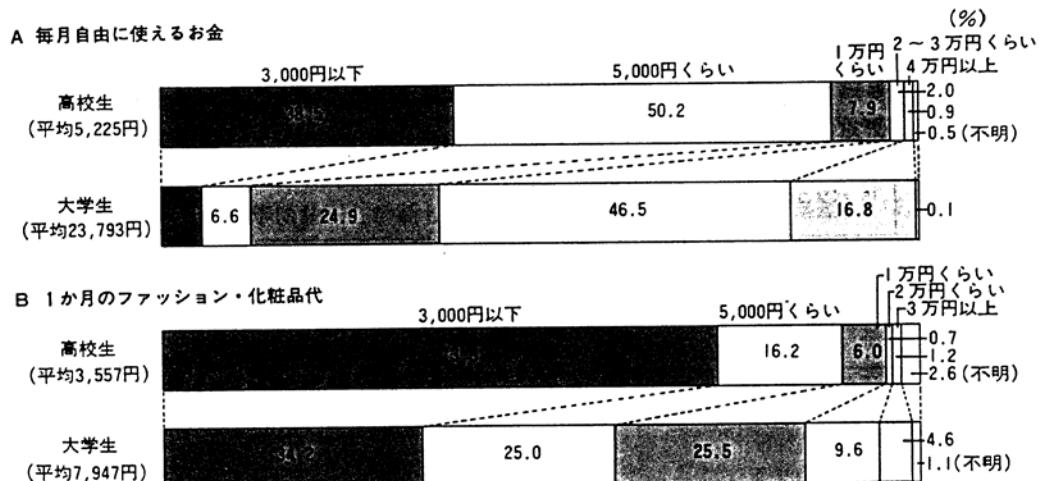
それらを自我の一部のようにして生きている。若者の生活必需品（オーディオ、スポーツ用具、レコード、本など）を 15 項目あげ、その所有率を調べた。

全体に高校生より大学生のもの所有率の方が高い（平均高校生 26.1%、大学生 31.5%）。

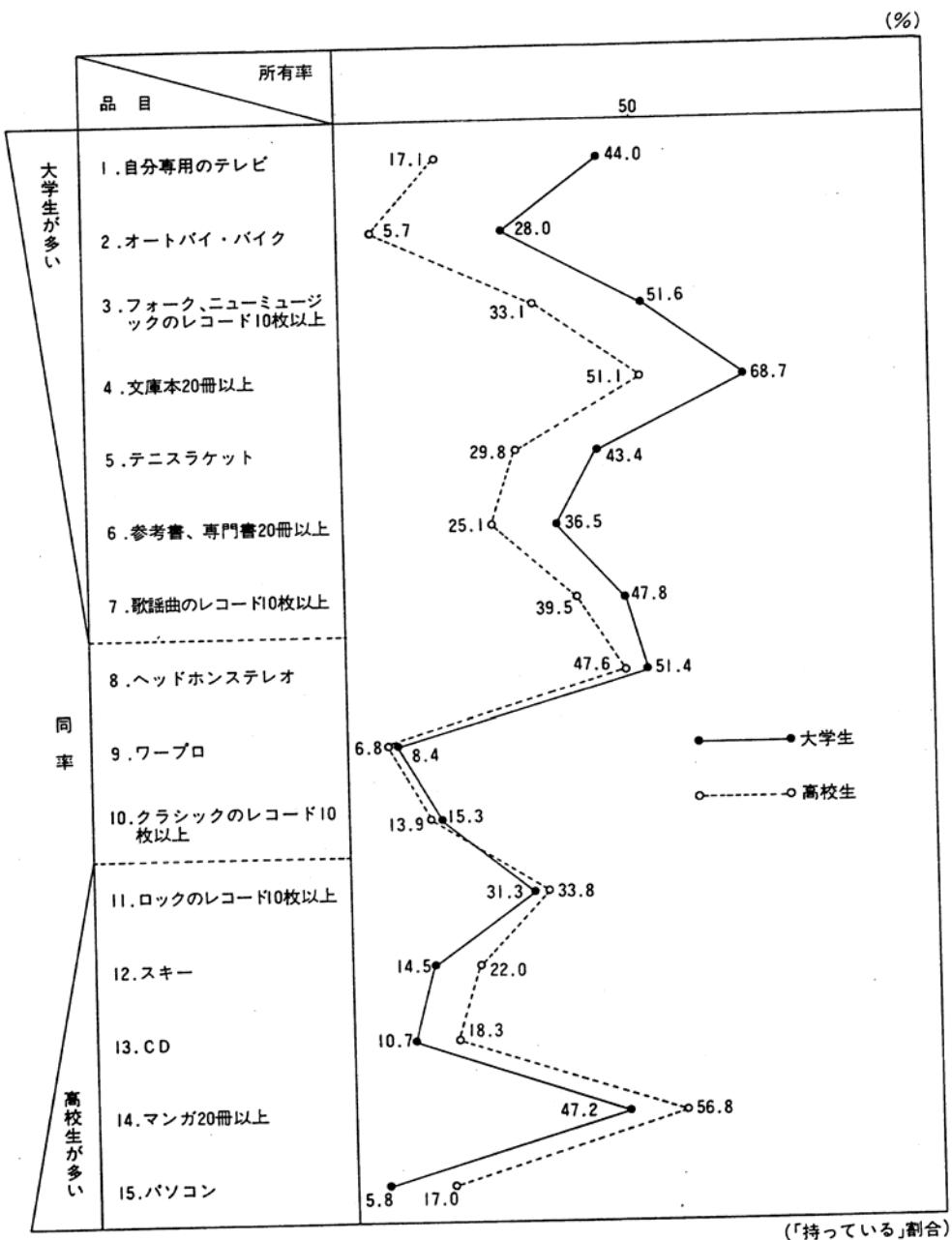
図 II-4 は、大学生と高校生の差の大きい順に所有率を示したものである。高校生に比べ大学生が多く所有しているものは、「自分専用のテレビ」「オートバイ」「フォーク・ニューミュージックのレコード」「文庫本」「テニスラケット」などである。逆に高校生が多く所有しているものは「パソコン」「マンガ」「CD」「スキー」である。「パソコン」や「CD」の所有率が大学生より高校生の方が高いということは、ハイテク機器がより若い層に浸透している例として興味深い。

以上のように同じ若者とはいえ、高校生と大学生では、行動経験、休日の過ごし方、お金、持っているものに関して大きな差違がある。高校生はインドアに籠ることが多く、勉強以外の行動経験が少ない。大学生は勉強はせず、高校時代の鬱積を晴らすようにアウトドアでさまざまな体験をしている。

図 II-3 每月自由に使えるお金



図II-4 「もの」所有率



## 第III章 若者の成長スタイル



若者が成長するうえで達成しておかねばならない課題が多くある。その中で、もっとも大切なのは、「自分らしさ」の発見である。

しかし、一握りの若者を除いて、多くの者は達成感を体験していない。自分らしさを発見するハードルを越えることなく、年を重ねているのが実情である。

ここからは、少年の仮面をかぶったままの若者が誕生してくる。少年に訣別し、新しい自分を模索する若者は少ない。

したがって、若者は自分らしさを発見しないまま大きくなっているので、成長の足跡をたどるのは難しい。

これまで、こうした若者論が多くあった。しかし、それをデータで裏づけたものは乏しい。本章は、第II章に引き続き高校生と大学生を比較しながら、若者の成長スタイルはどうなっているのか、探る。つまり、高校生と大学生の間に成長の「落差」があるのか、ないのか、を調べる。

### 1. 味覚は変わるか

子どもの頃どうしても食べられなかったニンジンが、大きくなるとそれほど抵抗なく食

べなれた経験がある人は多いだろう。また、サビ抜きのすしを食べていた人が、いつの間

にかサビ入りを食べるようになっている。

子どもから大人になる間には、身体や心の変化だけでなく味覚も変わるのである。従来の若者論の中では、この味覚の視点から論じたものは少ない。

表III-1は、味覚が高校生と大学生ではどう変わるか、調べたものである。

具体的に説明すると、「さしみにワサビをつける」者は、高校生より大学生(78%<83%)のほうが多い。そして、その傾向は女性のほうが顕著である。同じことが、「シーマイにからしをつける」ことにもいえる。やはり、大学生(とりわけ女子大生になると)のほうがからしをつけてシーマイを食べている。

ところが、カレーは辛口か甘口かでは、「全体」では高校生のほうが辛口を好んでいる(72%>64%)。しかし、それは男子にいえるこ

とで、女子では差がない。これは、推測の域を出ないが、高校生の男子が今の「辛口ブーム」にいち早く反応したもの、と考えられる。

次に調べたものが、食べ物の好き嫌いについてである。小さい時ほど好き嫌いが多い。大人になっても嫌いなものがあって当然である。しかし、多くの人は、嫌いなもの数が少なくなっているはずである。

若者はどうであろうか。表III-2が示すように、「好き嫌い」が「ほとんどない」と答えた者は、大学生に多い(41%<47%)。逆に、「たくさんある」という者は高校生に多い(16%>13%)。

そして、最後に「飲み物の嗜好」を調べる。図III-1に注目。興味深い事実が読みとれる。喫茶店にはいって注文するものがそれぞれ異なる。結果は、次のとおりである。

表III-1 味覚の変化

|               |     | 全 体    |       | 男 子    |       | 女 子    |       |
|---------------|-----|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
|               |     | 高 校 生  | 大 学 生 | 高 校 生  | 大 学 生 | 高 校 生  | 大 学 生 |
| さしみにワサビをつけるか  | つける | 78.3 < | 82.8  | 83.2 < | 89.8  | 67.6 < | 78.0  |
| シーマイにからしをつけるか | つける | 54.6 < | 66.8  | 58.1 < | 66.8  | 47.4 < | 66.9  |
| カレーは甘口か辛口か    | 辛 口 | 72.3 > | 64.1  | 79.6 > | 75.6  | 56.7   | 56.3  |

(「つける(辛口)」の割合)

表III-2 食べ物の好き嫌い

|       | たくさんある | 少しある | ほとんどない |
|-------|--------|------|--------|
| 高 校 生 | 16.2   | 42.9 | 40.9   |
| 大 学 生 | 12.8   | 39.9 | 47.2   |

○男子大学生…………コーヒー（64%）

○男子高校生…………コーヒー（50%）

○女子大学生…………紅茶（33%）

○女子高校生…………パフェ（44%）

コーヒーは男性に多く、しかも年を重ねる  
とファンが増えていく。一方、女性は高校生  
のときはパフェで、大学生になるとしゃれて、  
大人っぽい紅茶を飲むようになる。

また、ジュースやコーラは男子大学生に人  
気がなく、高校生や女子大学生に好まれてい  
る。

こうした飲み物の嗜好は、ひとつに味覚の  
問題もあるが、やはりコーヒーは男の大人、  
紅茶は貴婦人が似合う、というイメージの影響

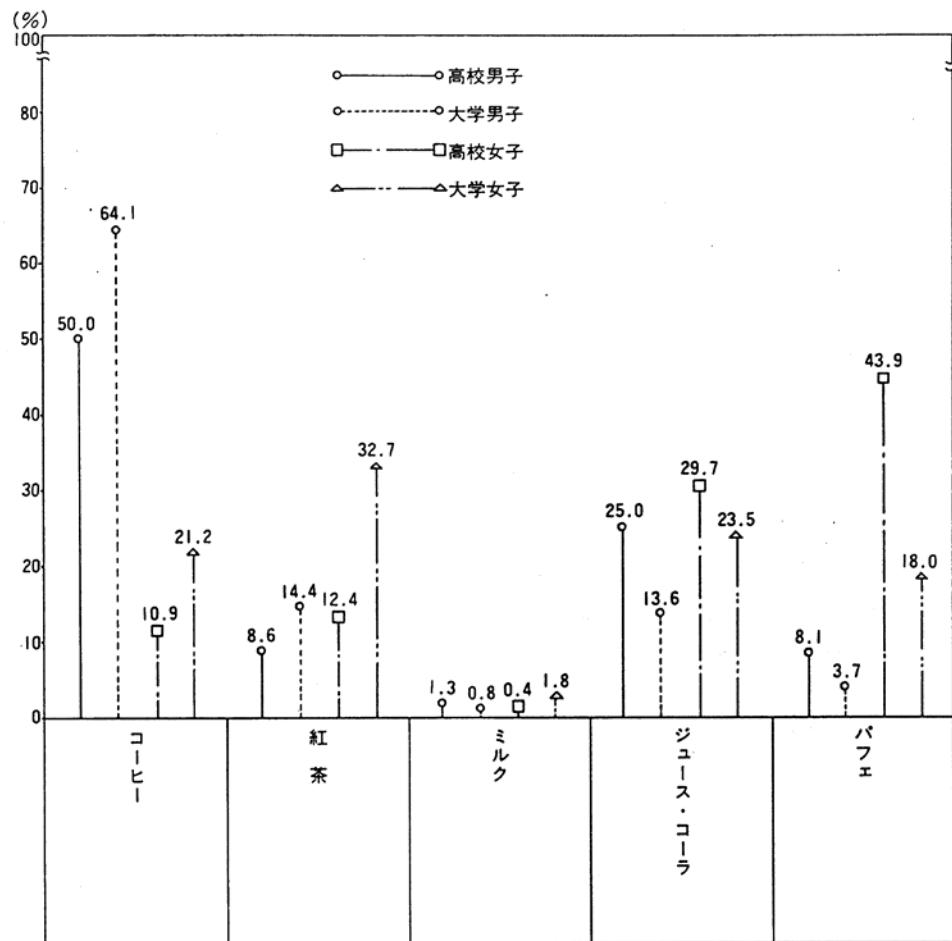
が強いものと考えられる。

いずれにせよ、飲み物の好みまで高校生と  
大学生の間には歴然たる差がみられる。

味覚や嗜好に焦点をあててみると、高校生  
のほうが好き嫌いが多く、ワサビやからしに  
抵抗を持ち、パフェやジュースという刺激の  
少ない飲み物を好んでいる。いうなれば、ま  
だ子どもの味覚の域に近い状態にある、とい  
える。

一方、大学生は飲み物ではコーヒー党と紅  
茶党に分かれるものの、男女とも好き嫌いが  
少なくなり、刺激のある香辛料にも抵抗がな  
くなる。

図III-1 飲み物の嗜好



## 2. 若者はいつ怒るか

権威に反発することや社会の腐敗に怒りを覚えるのは、若者のひとつの証しだった。自分の欲求が理由もなく充足されなかつたり、特定の人だけが不利益をこうむったとき、カッカする。

ところが、「怒らない若者」が出現してきた、という指摘が多い。若者は本当に怒らなくなつたのか。それを確かめてみる。

表III-3。これは、今の若者がどんなときにカッカする(頭にくる)か、を調べたものである。カッカするベスト3は、次のとおりである。

1位……自転車や車などキズつけられたとき

き(58%)

2位……親が約束を守らないとき(46%)

3位……突然アルバイトがクビになったとき(45%)

数値は「とてもカッカする」

である。

一方、ほとんど頭にこないのは、「好きなタレントが結婚宣言をしたとき」(81%)、「帰りが遅いと親に注意されたとき」(54%)、「彼(彼女)にふられたとき」(52%)などである。

若者が怒りを感じるのは、自分が大切にしているものや、生活を支えているものが理由もなく壊されたときである。そのように考え

表III-3 若者が「カッカ」するとき

|                         | とても<br>カッカする<br>(%) | 少し<br>カッカする<br>(%) | ほとん<br>どしない<br>(%) |
|-------------------------|---------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 自転車、車などにキズをつけられたとき   | 58.2                | 31.4               | 10.1               |
| 2. 親が約束を守らないとき          | 45.9                | 39.1               | 14.8               |
| 3. 突然アルバイトがクビになったとき     | 44.5                | 34.2               | 19.7               |
| 4. 生徒(学生)の活動目的が叶わなかったとき | 40.0                | 42.8               | 17.1               |
| 5. 自由奔放なトコトコが嫌で困るとき     | 31.7                | 31.9               | 36.2               |
| 6. テレビやラジオがうるさいとき       | 21.7                | 27.6               | 50.4               |
| 7. 勉強が上手くいかないとき         | 19.5                | 27.2               | 51.5               |
| 8. 友達が喧嘩で喧嘩を始めたとき       | 10.4                | 35.7               | 53.7               |
| 9. 好きなタレントが結婚宣言をしたとき    | 6.5                 | 12.2               | 80.6               |

ると、好きなタレントの結婚宣言は所詮は遠い世界のことなので、あきらめが早く、カッカしない。

こうした若者の怒り方を高校生と大学生別に調べたものが、表III-4である。数値は「とてもカッカする」を示してある。

表中の「全体」の不等号に着目すると、次のようなことはいえる。

#### 高校生が頭にくること

- 「親が約束を守らないとき」(高校生47%>大学生42%)
- 「生徒(学生)の活動に教師が干渉する」(42%>35%)
- 「政治家が汚職したとき」(24%>16%)
- 「好きなタレントが結婚宣言をしたとき」(7%>5%)

#### 大学生が頭にくること

- 「自転車、車などにキズをつけられたとき」

き」(大学生64%>高校生56%)

- 「突然アルバイトがクビになったとき」(46%>42%)

○「試験中に友だちがカンニングをしてよい点をとったとき」(35%>31%)

- 「彼(彼女)にふられたとき」(23%>18%)

興味深い結果である。高校生がカッカするのは、権威に対する反発、不信や、不正を憎む正義感に基づいている。

それが、大学生になると車のキズやアルバイトのクビ、それに試験中のカンニングというように、自分たちが直接に不利益をこうむるときにカッカする。

高校生の怒りの基準が「善一悪」とすれば、大学生は「利益一不利益」を基準にしている。すると、若者は年齢とともに善一悪を中心とした生き方から、利益一不利益に重点を置いたスタイルに変わっていくもの、と考えられる。

表III-4 若者がカッカするとき×属性

(%)

| 属性                     | 全 体    |      | 男 子    |      | 女 子    |      |
|------------------------|--------|------|--------|------|--------|------|
|                        | 高 校    | 大 学  | 高 校    | 大 学  | 高 校    | 大 学  |
| 1. 自転車、車などにキズをつけられたとき  | 56.1 < | 63.9 | 59.0 < | 67.7 | 50.2 < | 61.5 |
| 2. 親が約束を守らないとき         | 47.3 > | 41.6 | 43.2 > | 29.5 | 55.1 > | 50.2 |
| 3. 突然アルバイトがクビになったとき    | 43.9 < | 46.2 | 43.0   | 46.2 | 45.7   | 46.3 |
| 4. 生徒(学生)の活動に教師が干渉するとき | 41.7 > | 34.7 | 41.1 > | 34.3 | 43.4 > | 34.9 |
| 5. 試験中に友だちがカンニングをするとき  | 30.7 < | 34.6 | 25.5   | 26.6 | 40.9   | 40.0 |
| 6. 政治家が汚職したとき          | 23.7 > | 16.1 | 25.9 > | 20.1 | 18.6 > | 13.3 |
| 7. 彼(彼女)にふられたとき        | 18.3 < | 23.1 | 19.1 < | 24.6 | 16.6 < | 22.0 |
| 8. 働りが悪いと親に主張されたとき     | 10.9   | 8.9  | 10.6 > | 6.5  | 11.4   | 10.4 |
| 9. 好きなタレントが結婚宣言をしたとき   | 7.2 >  | 4.6  | 7.3 >  | 3.7  | 6.6    | 5.3  |

(「とてもカッカする」割合)

### 3. 若者は何に自信をもっているか

若者は親や教師という身近な権威に反発し、彼らと距離をおくことによって、新しい自分というものを発見する。そうした「依存」から「自立」への葛藤の中で、「自分らしさ」(自信)を形成していく。

それでは、若者はどんなことに自信をもっているのであろうか。それを確かめたのが、表III-5である。これは、若者の生活場面を16項目に分け、それぞれの能力(できる—できない)をたずねたものである。

<6割以上の者ができること>

- 「朝食の用意を自分でする」(できる: 78%)
- 「自分の洗濯は自分でする」(72%)
- 「親と離れてくらす」(66%)
- 「小遣いがなくなったら自分でかせぐ」(65%)
- 「友だちと話し込んで徹夜をする」(62%)
- 「1週間ぐらい国内旅行をひとりでする」(61%)

一方、7割以上の者ができないことは、次のことである。

- 「みんなの前で気のきいたスピーチをする」(できない: 84%)
- 「ファッション雑誌にのるような服装をする」(80%)
- 「社会問題で、大人と議論して負けない」(82%)
- 「コンパで歌や芸をしてみんなから受けれる」(77%)
- 「好きな異性に『つきあってください』といふ」(76%)
- 「海外旅行をひとりでする」(71%)

この結果から粗くいって、若者は、仲間うちの間では自信をもてないものの、親から離れても日常生活に支障をきたさずにくらせる、と思っている。

ところで、こうした自信は高校生と大学生

とでは、どう変わっていくのだろうか。

図III-2に注目してほしい。全体的にみて大学生のほうが、多くのことに自信をもっている。確かに、国内や海外の旅行にいく、それから北海道の牧場で働くことの自信は、ほとんど差がない。

しかし、大学生は、洗濯は自分でし、小遣いも自分でかせげるし、おちこんでいる友だちを立ち直らせることもできる。さらに、初対面の人とでも気軽に話ができる、交差点で困っている盲人の手を引いてあげられる、と考えている。

こうした高校生と大学生の自信の「差」は、II章で述べた行動特性(高校生はインドアの行動、大学生はアウトドアの行動)や社会的な制約の度合を考えると当然かも知れない。

つまり、高校生に比べると、大学生のほうが自由で行動半径が広く、体験量も多いので、それらの蓄積が自信となる。例えば、大学生は実際アルバイト経験も豊富で、下宿生も多い。そして友人と語るチャンスも多い。したがって、それらの自信が高校生より多くなるのは、無理もない。

さて、高校生と大学生の自信の「差」が明らかになったところで、彼らの自信を分類してみる。その際分類の手法は、因子分析による。高校生と大学生を別々に分析した結果が、表III-6、表III-7である。

高校生には、「ひょうきん」「自力」「家事能力」の3つの因子が析出されている。

大学生には、「一人旅」「オピニオン」「交際」「援助」「親ばなれ」の5つの因子が析出されている。

同じ因子に入った自信群は、回答者には同質のものと認識されている、ことを示す。例えば、高校生の「ひょうきん因子」をみると、「コンパで芸をしてみんなにうける」と「み

んなの前で気のきいたスピーチをする」という自信は、類似したものとして高校生に受けとられ、「ひょうきん因子」と名づけられる。

2つの表を比べると、因子の出方が異なっている。つまり、高校生の自信のもち方と大学生の自信のもち方がちがうのである。

具体的に検討していく。

高校生の自信は3つかたまりからなる。それが大学生になると、5つかたまりになり、自信が限定されてくる。いうなれば、大

学生は多様な場面で自分らしさ（個性）を發揮できるようになる。

例えば、高校生の「ひょうきん因子」は、「コンパで芸をしてみんなにうける」「みんなの前で気のきいたスピーチをする」「異性に『つきあって』という」「初対面の人とすぐ話ができる」項目で特徴づけられていた。

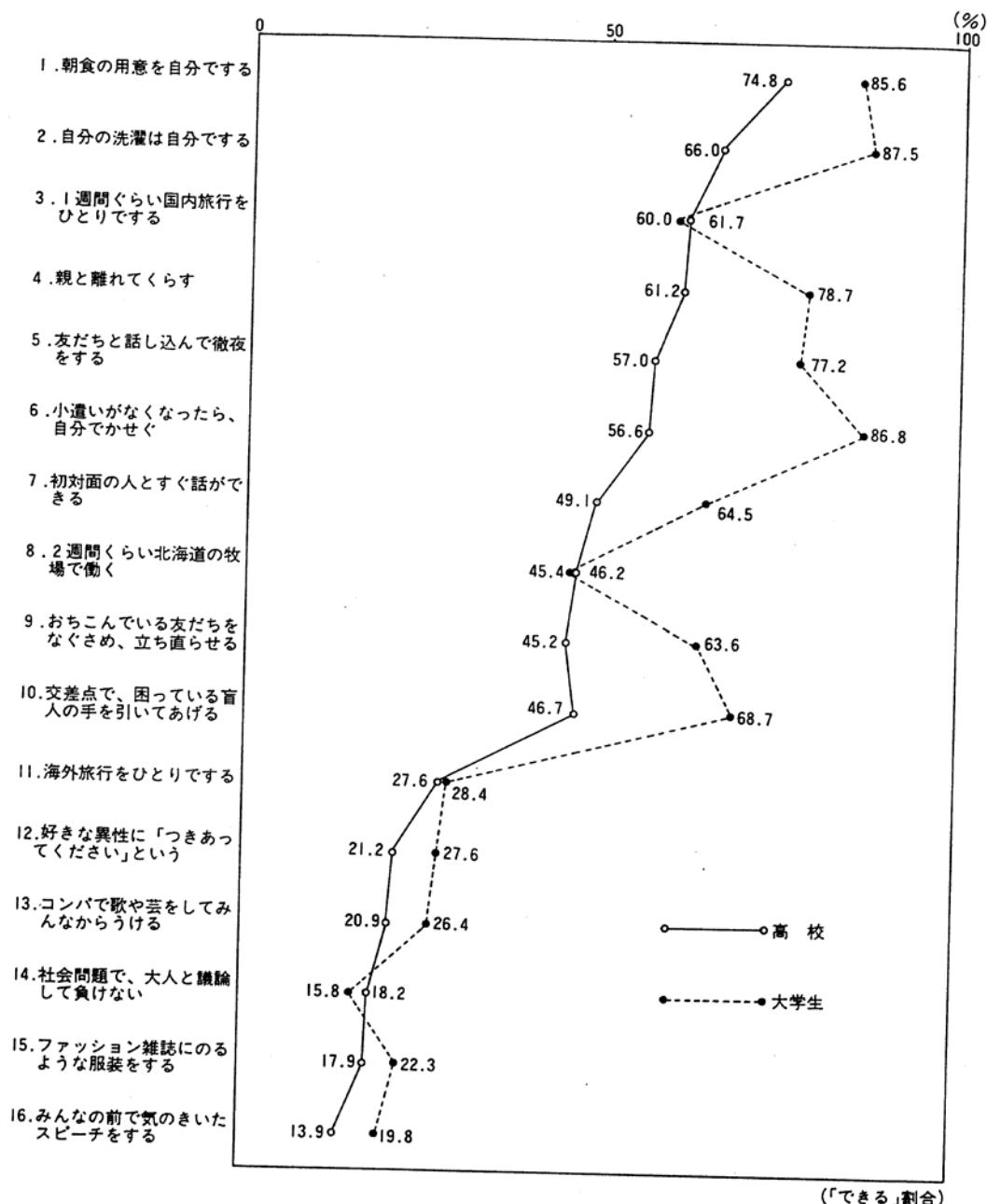
ところが、それらの項目は大学生になると、「オピニオン因子」と「交際因子」を特徴づけるものに分かれる。

表III-5 若者の自信

(%)

| 順位 |                        | 全 体    |      |
|----|------------------------|--------|------|
|    |                        | できる    | できない |
| 1  | 朝食の用意を自分でする            | 77.6 > | 22.1 |
| 2  | 自分の洗濯は自分でする            | 71.6 > | 28.1 |
| 6  | 1週間ぐらい国内旅行をひとりでする      | 61.3 > | 38.3 |
| 3  | 親と離れてくらす               | 65.7 > | 33.8 |
| 5  | 友だちと話し込んで徹夜をする         | 62.3 > | 37.4 |
| 4  | 小遣いがなくなったら、自分でかせぐ      | 64.5 > | 35.2 |
| 7  | 初対面の人とすぐ話ができる          | 53.2 > | 46.5 |
| 10 | 2週間くらい北海道の牧場で働く        | 45.6 < | 54.0 |
| 9  | おちこんでいる友だちをなぐさめ、立ち直らせる | 50.0 > | 49.1 |
| 8  | 交差点で困っている盲人の手を引いてあげる   | 52.5 > | 47.1 |
| 11 | 海外旅行をひとりでする            | 28.2 < | 71.3 |
| 12 | 好きな異性に「つきあってください」という   | 22.9 < | 76.4 |
| 13 | コンパで歌や芸をしてみんなから受ける     | 22.4 < | 77.0 |
| 15 | 社会問題で、大人と議論して負けない      | 17.6 < | 81.9 |
| 14 | ファッション雑誌にのるような服装をする    | 19.1 < | 80.4 |
| 16 | みんなの前で気のきいたスピーチをする     | 15.5 < | 84.0 |

図III-2 若者の自信×属性



つまり、「気のきいたスピーチ」は、「社会問題で大人と議論しても負けない」項目といっしょにくくられ、「オピニオン因子」と名づけられる。一方、「異性へのプロポーズ」と「コンパでうける芸」は2つでかたまり、「交際因子」と名づけられる。

また、高校生の「自力因子」を特徴づけていた「1週間くらい国内旅行をひとりでする」「海外旅行をひとりでする」「親と離れてくらす」「小遣いがなくなると自分でかせぐ」項目は、大学生になると2つの因子（「一人旅因子」と「親ばなれ因子」）に分かれる。

つまり、ひとりでの国内旅行や海外旅行は「2週間くらい北海道の牧場で働く」項目と結びつき、一人旅という修業の意味合いが強くなる。大学生は長期の休みを利用して旅を続ける者が多い。その旅は旅行と違って自己をみつめ直すチャンスが多く、結果として人間がひとまわり大きくなることが多い。

高校生は、それらの項目に親から離れて自分ひとりですることに力点をおいていた。一方大学生は「ひとり」よりも「旅」という体験に意味を見いだしている。

それから、「親と離れてくらす」項目は、大学生では、高校生の「家事能力因子」と結びつく。したがって、それらが特徴づける因子は「親ばなれ因子」と呼ばれる。

つまり、高校生にとって「洗濯を自分でする」ことや「朝食の用意を自分でする」ことは、親と同居していてもするので、必ずしも親ばなれを意味しない。ところが、大学生が家事を自分ですることは親と離れてくらすことにつながるので、親ばなれが進む。

さらに、高校生から発生しなかった因子に、「交差点で盲人の手をひいてあげる」「おちこんでいる友人を立ち直らせる」項目で特徴づけられる「援助因子」がある。

大学生になると、さまざまな人間との交流がふえ、人を見る目が肥えてくるのだろうか。ハンディキャップを持った人やつまずいた人と暖かく接するようになる。

かくて、大学生は高校生に比べて、強い自信をもっている。しかもその自信が多様であるため、自分らしさを發揮できるチャンスを多くもっている。

表III-6 高校生の自信の分類(因子分析による)

| 因子名<br>因子を特徴づける変数 | 第1因子<br>ひょうきん因子              | 第2因子<br>自力因子                | 第3因子<br>家事能力因子        |
|-------------------|------------------------------|-----------------------------|-----------------------|
|                   |                              |                             |                       |
|                   | ○コンパで芸をしてみんなにうける<br>0.634    | ○1週間くらい国内旅行をひとりでする<br>0.744 | ○自分の洗濯は自分でする<br>0.691 |
|                   | ○みんなの前で気のきいたスピーチをする<br>0.626 | ○海外旅行をひとりでする<br>0.563       | ○朝食の用意を自分でする<br>0.657 |
|                   | ○異性に「つきあって」という<br>0.495      | ○親と離れてくらす<br>0.552          |                       |
|                   | ○初対面の人とすぐ話ができる<br>0.481      | ○小遣いがなくなると自分でかせぐ<br>0.515   |                       |

(数字は因子得点、各変数がどの程度その因子の性質と関連があるかを示す)

表III-7 大学生の自信の分類

|            | 第1因子<br>一人旅因子  | 第2因子<br>オピニオン因子  | 第3因子<br>交際因子   | 第4因子<br>援助因子  | 第5因子<br>親ばなれ因子  |
|------------|--|--|--|---|---|
| 因子名        |  |  |  |   |   |
| 因子を特徴づける変数 | <ul style="list-style-type: none"> <li>○一週間、国内旅行をひとりする<br/>0.783</li> <li>○海外旅行をひとりする<br/>0.548</li> <li>○2週間くらい北海道の牧場で働く<br/>0.498</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○みんなの前で気のきいたスピーチをする<br/>0.777</li> <li>○社会問題で、大人と議論しても負けない<br/>0.457</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○異性に「つきあつて」という<br/>0.600</li> <li>○コンパで芸をしてみんなにうける<br/>0.376</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○交差点で盲人の手をひいてあげる<br/>0.427</li> <li>○おちこんでいる友人をたち直らせる<br/>0.412</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の洗濯は自分でする<br/>0.504</li> <li>○親と離れてくらす<br/>0.379</li> <li>○朝食の用意は自分でする<br/>0.326</li> </ul> |

## 4. 若者は両親をのり越えたか

若者が「一人前」の大になるためには、職業的な自我形成と同時に、両親をのり越えていかねばならない。

ところが、多くのデータが語るところによれば、尊敬する人(歴史上の人物を含む)として両親をあげる者が多い。若者にとって、今や両親はのり越える対象でなく、尊敬の対象となっているようである。

そこで、具体的な能力や態度を限定し、若者は親に比べてどのくらいまさっているか、をたずねてみた。その際、男子は父親、女子は母親を想定してもらった。

表III-8は、能力がまさっているのが「自分の方」と「親の方」と、答えた数値のみを示してある。

興味深い結果が読みとれる。若者がまさっているものは、次の3つである。

- 「ファッショングル感覚」(58%>8%)
- 「人を楽しくさせる能力」(43%>14%)

○「外国で生活する能力」(35%>23%)  
その他の項目は、どれも親の方がまさっていると答えている。例えば、「常識や社会についての見方」(65%>10%)、「家事をする能力」(67%>14%)、それに「バイタリティ(がんばる力)」(49%>18%)は、とうてい親にかなわないほどの「差」がある。

若者が両親にまさっているのは、せいぜいファッショングル感覚と人を楽しくさせる能力ぐらいである。

それでは、こうしたわずかながらの親に対する優位は、高校生と大学生の間で違いがみられるであろうか。

表III-9。まず「全体」の不等号に注目してほしい。大学生の数値が多いのは「外国で生活する能力」ぐらいである。そして、これは男女に関係なくそうである。

ところが、他の項目は「ファッショングル感覚」での男子大学生を別にして、高校生と大学生

の間に顕著な「差」はみられない。

ということは、大学生だからといって親の力（パワー）に接近しているとは限らない。親との距離は、大学生と高校生はほぼ同じ線上に並んでいる、といったほうが正確だろう（ただし、「外国で生活する能力」を除く）。

そうすると、親の能力との比較は、これまでの分析結果と異なる。味覚や飲み物の嗜好、

頭にくる事柄、それに社会生活での自信度は、高校生と大学生の間にかなりの「差」がみられた。ところが、親のパワーとの比較では、両者の間にはほとんど差がみられない。

つまり、親は大学生にとっても大きく映り、のり越えるのが困難な存在となっている。若者が尊敬する人物として両親をあげていることは、このデータからも理解できる。

表III-8 若者と両親の能力の比較

(%)

|                  | 自分の方 | 親の方    |
|------------------|------|--------|
| 1. ファッション感覚      | 58.0 | > 8.1  |
| 2. 人を楽しくさせる能力    | 42.8 | > 14.3 |
| 3. 外国で生活する能力     | 34.9 | > 22.7 |
| 4. 人への思いやりやつくす態度 | 21.5 | < 30.6 |
| 5. バイタリティ（がんばる力） | 17.9 | < 48.7 |
| 6. 正義感（不正を憎む心）   | 16.2 | < 24.8 |
| 7. 家事をする能力       | 14.3 | < 67.4 |
| 8. 常識や社会についての見方  | 9.6  | < 64.7 |

（「まさっている」割合）

高校生と大学生の間に成長の「落差」はあるか。この問い合わせるのが本章の課題であった。

結論を急ぐならば、落差は「ある」といえる。その「落差」を具体的に述べる。

1. 大学生になると好き嫌いが減り、味覚や嗜好が大人に近いものになる。
2. 高校生は、「善一悪」、大学生は「利益一不利益」を基準にして怒る。
3. 社会生活での自信は、大学生のほうがさまざまな場面でもっている。つまり、

体験量が豊富で、「自分らしさ」を發揮している。

しかし、こうした高校生から大学生への成長スタイルは、親の能力への接近に結びつかない。大学生といえども、親の前では高校生同様小さくならざるをえない。

したがって、若者の成長スタイルは、親のパワーに接近できないまま、高校生から大学生へと脱皮していく。つまり、現在の若者の成長スタイルは、片肺飛行の自我形成を行っているといえる。

表III-9 若者と両親の能力の比較×属性

(%)

|                   | 全 体         |       | 男 子         |       | 女 子         |       |
|-------------------|-------------|-------|-------------|-------|-------------|-------|
|                   | 高 校 生       | 大 学 生 | 高 校 生       | 大 学 生 | 高 校 生       | 大 学 生 |
| 1. ファッション感覚       | 57.2        | 60.1  | 59.3 < 70.3 |       | 52.8        | 53.5  |
| 2. 人を楽しくさせる能力     | 42.8        | 42.9  | 46.5        | 50.7  | 35.2        | 37.5  |
| 3. 外国で生活する能力      | 31.6 < 44.5 |       | 27.6 < 43.5 |       | 39.0 < 45.7 |       |
| 4. 人への思いやりやつくす態度  | 22.3        | 19.1  | 24.6        | 25.5  | 16.8        | 14.5  |
| 5. ハイタクルティ(かんぱる力) | 18.2        | 17.0  | 18.2        | 13.0  | 17.9        | 20.0  |
| 6. 正義感(不正を嫌う力)    | 16.5        | 15.3  | 15.4        | 14.7  | 18.3        | 15.7  |
| 7. 実験をする能力        | 14.9        | 12.8  | 20.6 < 25.5 |       | 3.2         | 3.5   |
| 8. 経済や社会についての見方   | 9.2         | 10.7  | 9.8         | 9.9   | 7.8         | 11.2  |

(自分のほうが「まさっている」割合)

## 第IV章 若者文化のタイプ



現代の若者は新人類などとよばれ、若者文化のかるさ、とらえどころのなさが話題となっている。しかし実際には、同じ新人類のなかにもさまざまな若者文化のタイプがある、

と考えられる。

本章では青少年のさまざまな行動と関連づけながら、若者文化のタイプについて分析してみたいことにしたい。

### 1. 若者文化の4つのタイプ

軽薄短小、軽チャ一などとよばれる現代の若者文化のなかには、どのようなタイプが存在するのだろうか。本調査では表IV-1に示されるように、マンガやアイドル歌手、映画などについて12の質問をおこなって若者の場面、場面における価値観を調べた。次にそれを数量化III類にかけ、若者文化をタイプ分ける軸を析出させた。

まず第I軸（相関係数0.3684）は、表IV-2に示されるように、プラス方向に「コンサートや試合は静かにみる」(2.38)、「『巨人の星』が好き」(1.93)、「おちこんだときは考えこむ」(1.77)があり、マイナス方向に「結婚式は盛大にやる」(-1.30)、「おちこんだら発散させる」(-1.19)、「つっぽりアイドルが好き」(-1.16)があった。このプラス方

表IV-1 若者の価値観

(%)

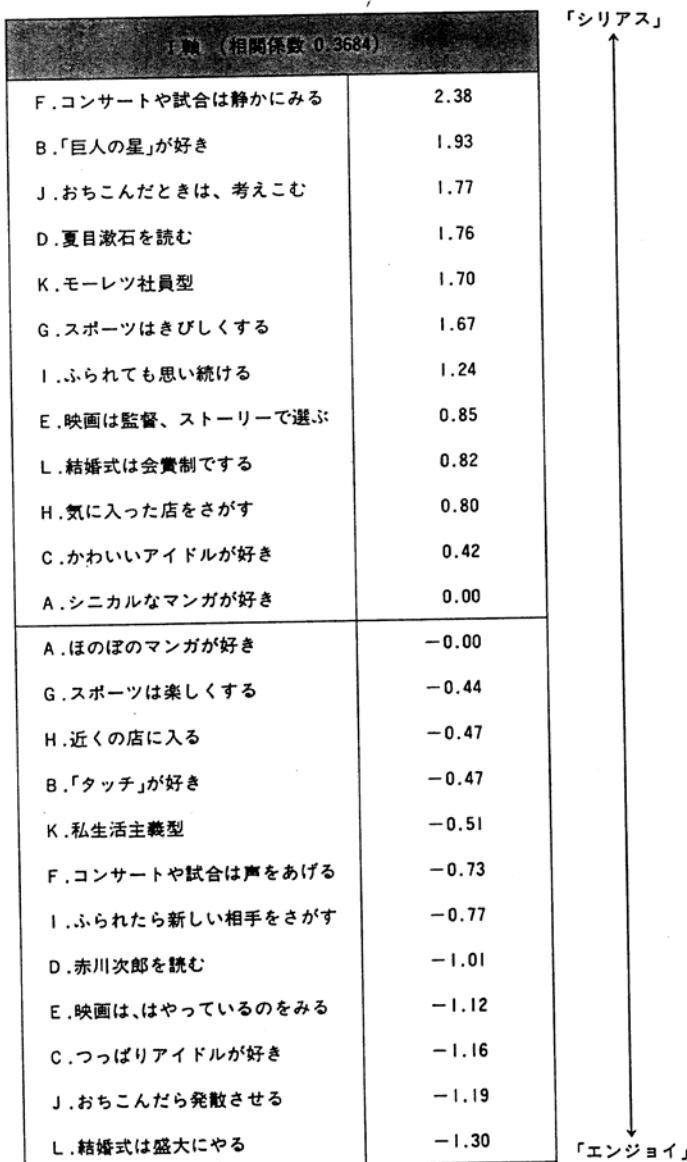
|                     |                               | 全 体  | 高 校 生 | 大 学 生 |
|---------------------|-------------------------------|------|-------|-------|
| A.4コママンガなら、どちらかというと | 1.ほのぼのとしたものが好き<br>(「コボちゃん」など) | 55.5 | 53.3  | 61.9  |
|                     | 2.シニカルなものが好き<br>(「かりあげくん」など)  | 42.9 | 44.9  | 37.2  |
| B.野球マンガなら、どちらかというと  | 1.「タッチ」が好き                    | 78.7 | 79.0  | 77.9  |
|                     | 2.「巨人の星」が好き                   | 20.1 | 19.6  | 21.4  |
| C.アイドル歌手なら、どちらかというと | 1.かわいいのが好き                    | 70.4 | 70.6  | 69.8  |
|                     | 2.つっぱりが好き                     | 25.8 | 25.1  | 27.7  |
| D.本を読むなら、どちらかというと   | 1.「三毛猫ホームズ」を読む                | 62.2 | 64.5  | 55.7  |
|                     | 2.「吾輩は猫である」を読む                | 36.4 | 33.9  | 43.6  |
| E.映画を見るなら、きっと       | 1.その時はやっているのをみる               | 42.3 | 43.2  | 39.6  |
|                     | 2.監督やストーリーで選ぶ                 | 57.1 | 56.0  | 60.1  |
| F.コンサートや試合をみにいけば    | 1.拍手したり、声をあげたりする              | 75.4 | 74.2  | 78.5  |
|                     | 2.ひとりで、静かにみている                | 23.6 | 24.6  | 20.9  |
| G.スポーツをするなら、きっと     | 1.きびしい練習やトレーニングをする            | 21.4 | 22.0  | 19.8  |
|                     | 2.仲間と楽しくやる                    | 77.9 | 77.2  | 79.6  |
| H.デートの途中でお腹がすいたら    | 1.近くの店にすぐ入る                   | 61.8 | 63.7  | 56.4  |
|                     | 2.気に入った店を何軒もさがす               | 36.4 | 34.0  | 43.0  |
| I.つきあっている人にふられたら    | 1.しかたがないので新しい相手をさがす           | 59.4 | 60.2  | 57.1  |
|                     | 2.ふられても思いつづけている               | 36.9 | 35.4  | 41.0  |
| J.おちこんだときは          | 1.友だちとさわいだりして発散させる            | 58.1 | 58.5  | 56.8  |
|                     | 2.考えこんだりして、ますますおちこむ           | 40.2 | 39.5  | 42.3  |
| K.会社にはいったら、きっと      | 1.残業しても仕事をバリバリやる              | 22.8 | 22.5  | 23.6  |
|                     | 2.余暇を大切にする                    | 76.0 | 76.2  | 75.3  |
| L.結婚式なら、どちらかというと    | 1.お金をかけて盛大にやる                 | 37.0 | 37.4  | 36.0  |
|                     | 2.会費制でこじんまりとやる                | 60.7 | 60.0  | 62.6  |

向は他にも「夏目漱石を読む」「スポーツはきびしくする」などがあり、おちついたアグレットな感覚で、「シリアルス」にものごとに対処していく志向を示す、と考えることができる。そしてそれに対してマイナスの方向は、他にも「映画は、はやっているのをみる」「赤川次郎を読む」などがあり、ノリがよい若者

感覺で、ものごとを「エンジョイ」する志向を示す、と考えることができる。このように若者文化をタイプ分けする第I軸は、「シリアルス」——「エンジョイ」を分ける軸として考えることができる。

次に第II軸（相関係数0.3226）は、表IV-3に示されるように、プラス方向に「『巨人

表IV-2 I軸のカテゴリースコア



の星』が好き」(3.43)、「シニカルなマンガが好き」(1.81)、「ふられたら新しい相手をさがす」(1.44)があり、マイナス方向に「ふられても思い続ける」(-2.32)、「おちこんだときは考えこむ」(-1.45)、「ほのぼののマンガが好き」(-1.37)があった。この第II軸はあまり明確ではないが、プラス方向は他

にも「おちこんだときは発散させる」などがあり、ある目標のために「クール」にものごとに対処していく志向を示す、と考えることができる。そしてマイナス方向は「つっぱりアイドルが好き」などがあるが、他にも『タッチ』が好き」「スポーツは楽しくする」などもあり、まわりのできごとに「ウエット」

表IV-3 II軸のカテゴリースコア

| II軸 (相関係数 0.3226) |       |
|-------------------|-------|
| B.「巨人の星」が好き       | 3.43  |
| A.シニカルなマンガが好き     | 1.81  |
| I.ふられたら新しい相手をさがす  | 1.44  |
| G.スポーツはきびしくする     | 1.13  |
| J.おちこんだときは、発散させる  | 0.98  |
| D.夏目漱石を読む         | 0.86  |
| H.近くの店に入る         | 0.54  |
| K.モーレツ社員型         | 0.47  |
| F.コンサートや試合は静かにみる  | 0.41  |
| C.かわいいアイドルが好き     | 0.37  |
| E.映画は、はやっているのを見る  | 0.28  |
| L.結婚式は会費制でする      | 0.17  |
| F.コンサートや試合は声をあげる  | -0.13 |
| K.私生活主義型          | -0.14 |
| E.映画は、監督、ストーリーで選ぶ | -0.21 |
| L.結婚式は盛大にやる       | -0.28 |
| G.スポーツは楽しくする      | -0.30 |
| D.赤川次郎を読む         | -0.49 |
| B.「タッチ」が好き        | -0.84 |
| H.気に入った店をさがす      | -0.92 |
| C.つっぱりアイドルが好き     | -1.01 |
| A.ほのぼののマンガが好き     | -1.37 |
| J.おちこんだときは、考えこむ   | -1.45 |
| I.ふられても思い続ける      | -2.32 |



にかかわっていく志向を示す、と考えることができる。このように若者文化をタイプ分ける第II軸は、「クール」——「ウエット」を分ける軸として考えることができる。

最後に第III軸（相関係数0.3040）は、表IV-4に示されるように、プラス方向に「スポーツはきびしくする」(3.29)、「モーレツ社

員型」(3.23)、「結婚式は盛大にやる」(1.89)があり、マイナス方向に「映画は監督、ストーリーで選ぶ」(-1.37)、「結婚式は会費制です」(-1.20)、「私生活主義型」(-0.98)があった。このプラス方向は他にも「映画は、はやっているのをみる」「赤川次郎を読む」などがあり、きびしさ、盛大さ、はやり

表IV-4 III軸のカテゴリースコア

| III軸（相関係数 0.3040）   |       |
|---------------------|-------|
| G . スポーツはきびしくする     | 3.29  |
| K . モーレツ社員型         | 3.23  |
| L . 結婚式は盛大にやる       | 1.89  |
| E . 映画は、はやっているのをみる  | 1.79  |
| I . ふられても思い続ける      | 0.84  |
| D . 赤川次郎を読む         | 0.48  |
| H . 近くの店に入る         | 0.43  |
| J . おちこんだときは、考えこむ   | 0.29  |
| C . かわいいアイドルが好き     | 0.08  |
| A . ほのぼののマンガが好き     | 0.06  |
| B . 「巨人の星」が好き       | 0.04  |
| F . コンサートや試合は静かに見る  | 0.03  |
| F . コンサートや試合は声をあげる  | -0.01 |
| B . 「タッチ」が好き        | -0.01 |
| A . シニカルなマンガが好き     | -0.07 |
| J . おちこんだときは、発散させる  | -0.20 |
| C . つっぱりアイドルが好き     | -0.21 |
| I . ふられたら新しい相手をさがす  | -0.52 |
| H . 気に入った店をさがす      | -0.73 |
| D . 夏目漱石を読む         | -0.83 |
| G . スポーツは楽しくする      | -0.88 |
| K . 私生活主義型          | -0.98 |
| L . 結婚式は会費制です       | -1.20 |
| E . 映画は、監督、ストーリーで選ぶ | -1.37 |

などを形式合理的に追求する「形式志向」を示す、と考えることができる。そしてマイナス方向は他にも「夏目漱石を読む」「気に入った店をさがす」などがあり、監督、ストーリー、気に入った店などを実質的に選択する「実質志向」を示す、と考えができる。このように若者文化をタイプ分けする第III軸は、「形式志向」——「実質志向」を分ける軸として考えることができる。

以上のように数量化III類をもちいて、若者文化をタイプ分けする第I軸（「シリアルス」——「エンジョイ」）、第II軸（「クール」——「ウェット」）、第III軸（「形式志向」——「実質志向」）を析出させた。ところで前述したように第II軸はあまり明確ではなく、また第III軸（相関係数0.30）と第II軸（相関係数0.32）の説明力に大きな差がないため、若者文化のタイプを考えるために、図IV-1に示されるように、第I軸と第III軸をもちいることにした。

まず第I象限は「形式」を「シリアルス」に追求する若者文化であり、「スポーツはきびしくする」「モーレツ社員型」などがそれを代表している。この若者文化は「ふられても思い続ける」「おちこんだときは考え方」などもあり、やや暗くなる傾向もあるが、一般にフワフワしているといわれる若者文化のなかで、まいあがらずに形式を追求していく点で、「おもい」若者文化ということができる。

次に第II象限は「形式」を「エンジョイ」する若者文化であり、「結婚式は盛大にやる」

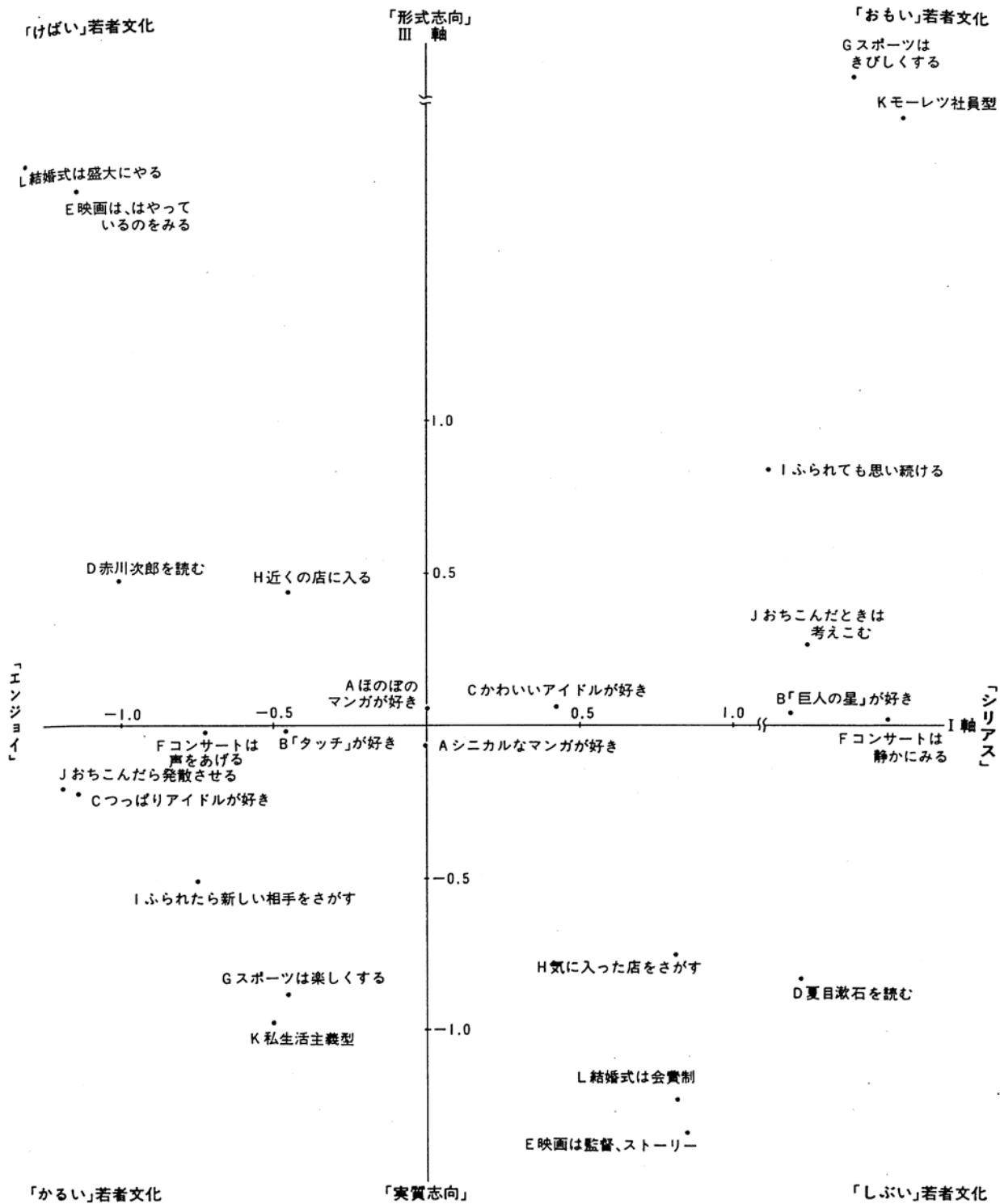
「映画は、はやっているのをみる」などがそれを代表している。この若者文化はともするとブランド志向、見栄をはることにもつながるが、はなやかでちょっとけばけばしい点で「けばい」若者文化ということができる。

そして第III象限は「実質」を「エンジョイ」する若者文化であり、「私生活主義型」「スポーツは楽しくする」などがそれを代表している。この若者文化はいわゆる「かるい」若者文化だろうが、「ふられたら新しい相手をさがす」「おちこんだら発散させる」などもあり、ものにこだわらないライト感覚もふくんだ「かるい」若者文化ということができる。

最後に第IV象限は「実質」を「シリアルス」にもとめる若者文化であり、「夏目漱石を読む」「映画は監督、ストーリーで選ぶ」などがそれを代表している。この若者文化は「気に入った店をさがす」などもあり、ともするとグルメ志向にもつながるが、「実質」をまじめに追求していく点で「しぶい」若者文化ということができる。

以上のように数量化III類をもちいて若者文化のタイプとして、「おもい」若者文化（第I象限）、「けばい」若者文化（第II象限）、「かるい」若者文化（第III象限）、「しぶい」若者文化（第IV象限）の4つを考えることができる。このように「軽チャ一」といわれる現代の若者文化のなかにも「おもい」若者文化や「しぶい」若者文化が存在することはひとつの発見であり、若者文化を一枚岩としてはとらえられないことを示しているといえよう。

図IV-1 若者文化のタイプ



## 2. 若者文化のタイプと行動経験

それでは次に若者文化のタイプと、II章で示した若者の行動経験との関係をみてみよう。若者文化の4つのタイプは若者の1か月の行動経験とどのようにむすびついているのだろうか。

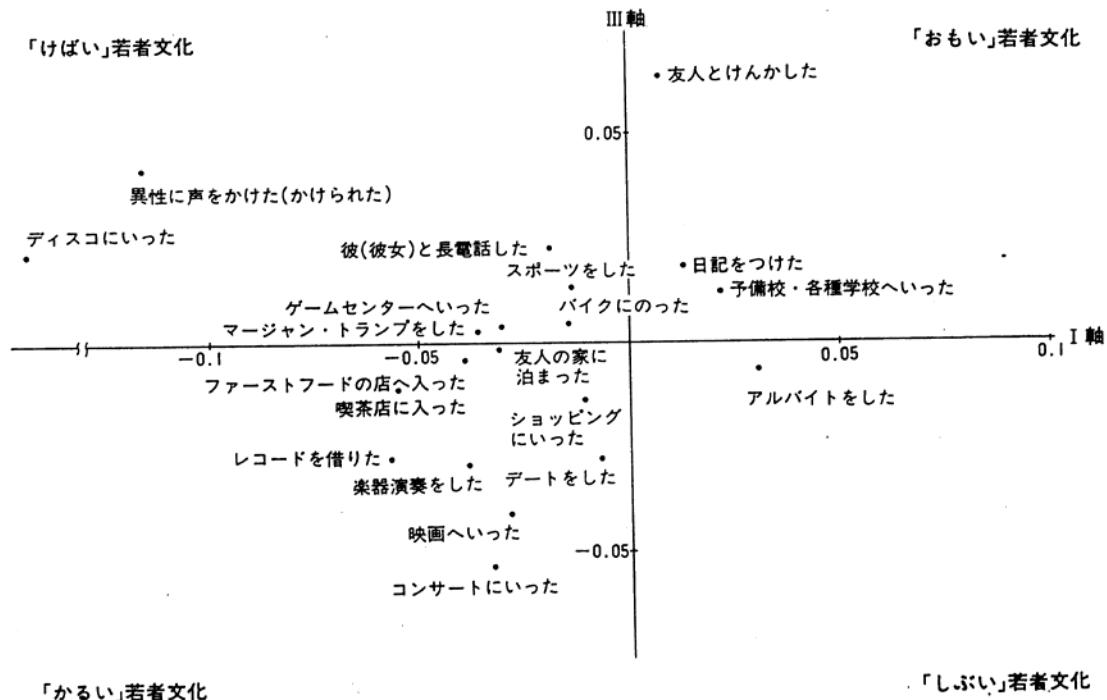
それぞれの行動経験をこの1か月に「した」と答えた者を若者文化のタイプにプロットすると、それは図IV-2のように示される。

まず「おもい」若者文化(第I象限)には、「友人とけんかした」「日記をつけた」「予備校・各種学校へいった」という行動経験がむすびついていた。このように「おもい」若

者文化にはやはり、おもく、シリアルな行動がむすびついているようであった。

次に「けばい」若者文化(第II象限)には「ディスコにいった」「異性に声をかけた(かけられた)」「彼(彼女)と長電話した」「ゲームセンターへいった」「マージャン・トランプをした」などの行動経験がむすびついていた。このうちII章で示したように「ディスコにいった」「異性に声をかけた(かけられた)」は高校生、大学生共通の「ナンパ」因子であり、「ゲームセンターへいった」「マージャン・トランプをした」も高校生、大学生共通の「ゲ

図IV-2 若者文化のタイプと行動経験



ーム」因子である。このように「けばい」若者文化には、ナンパ、デートなどのはでな行動がむすびついているようであった。

また「かるい」若者文化(第Ⅲ象限)には「コンサートにいった」「映画へいった」「レコードを借りた」「ファーストフードの店に入った」「喫茶店に入った」「友人の家に泊まった」「ショッピングにいった」「楽器の演奏をした」「デートをした」という行動経験がむすびついていた。このうち「ファーストフードの店に入った」「喫茶店に入った」「友人の家に泊まった」「ショッピングにいった」は高校生では「友人と街へ」因子であり、大学生では「友人とのつきあい」因子である。また「コンサートにいった」「楽器の演奏をした」は高校生、大学生共通の「音楽」因子である。このように「かるい」若者文化には、

友人とのつきあいを中心とするかるい行動がむすびついているようであった。

最後に「しぶい」若者文化(第Ⅳ象限)には、「アルバイトをした」という行動経験のみがむすびついていた。これは「しぶい」若者文化にアルバイト経験が貴重な社会体験としてむすびついているため、と考えることができる。

以上のように若者文化の4つのタイプは、それぞれに影響され、また影響をあたえる行動とむすびついていた。このように「おもい」若者文化、「けばい」若者文化、「かるい」若者文化、「しぶい」若者文化という4つの若者文化は、日々の具体的な行動とむすびついている、きわめて実態的な若者文化ということができる。

### 3. 若者文化のタイプとグループ・サークル加入

次に若者文化のタイプとグループ・サークルの関係についてみてみよう。いうまでもなくグループ・サークルは若者の生活に大きな影響をあたえているが、近年は特に大きな集団よりも3、4人の小集団(麻雀集団)への依存が強いことが指摘されている。(石井他編『現代のエスプリ168 ステューデント・アパシー』1981年)

そして本調査によれば「よくつきあっている仲のよいグループ」は表VI-5に示されるように、9割近く(87%)の若者にあり、それが「2つ」ある若者が36%、「3つ以上」ある若者が41%となっていた。また高校生と大学生を比較すると「仲のよいグループ」がある若者は高校生(85%)より大学生(93%)が多く、その数も「3つ以上」が高校生(39%)より大学生(46%)が多かった。また「仲のよいグループ」の性格は、「クラスの友人」が大学生(43%)より高校生(53%)が多く、「以前の学校の友人」が逆に高校生(19%)より大

学生(26%)が多かった。このように「仲のよいグループ」は高校生より大学生のほうが入っている者も数も多いが、その4分の1は高校時代からのグループのようであった。

次に部やサークルについてみると、表IV-6に示されるように、それに加入している若者は6割近く(58%)あり、特に運動系サークルがその6割強(62%)となっていた。また活動が週に「5~7日」が半数以上(53%)おり、それが「生活のかなりの部分を占めている」若者が36%いた。

また高校生と大学生を比較すると、部やサークルへの加入は高校生(57%)より大学生(61%)のほうが多いが、運動系サークルは大学生(53%)より高校生(65%)が多く、文化系サークルは逆に高校生(34%)より大学生(41%)が多かった。また活動が週に「5~7日」は大学生(31%)より高校生(61%)が多かった。このように部やサークルも高校生より大学生のほうが加入している者が多いが、高校生の

ほうが運動系サークルを中心とし、生活に占める時間が多いうようであった。

そしてこの「仲のよいグループ」と部やサークルを若者文化のタイプにプロットすると、それは図IV-3のように示される。まず「仲のよいグループ」がある者は、「かるい」若者文化にぞくしている。前述したように「かるい」若者文化には友人とのつきあいを中心とする行動がむすびついており、このような少人数の「仲のよいグループ」が、「かるい」若者文化の重要な要素になっているようであ

った。

そして部やサークルに加入している者は、逆に「おもい」若者文化にぞくしていた。このように部やサークルは「仲のよいグループ」と比較して、より「シリアルス」にその目的を追求すると考えられ、「おもい」若者文化の要素になっているようであった。

以上のように若者が関係しているグループ・サークルも、その性格によって異なる若者文化にぞくしていた。

表IV-5 仲のよいグループ

|            |         | 全 体  | 高 校 生 | 大 学 生 | (%) |
|------------|---------|------|-------|-------|-----|
| 仲のよいグループ   | 1. ある   | 87.3 | 85.2  | 93.0  |     |
|            | 2. ない   | 9.8  | 11.5  | 5.1   |     |
| 仲のよいグループの数 | 1~1つ    | 22.6 | 24.1  | 18.7  |     |
|            | 2~2つ    | 35.5 | 35.8  | 34.8  |     |
| 仲のよいグループの数 | 3~3つ以上  | 40.9 | 38.8  | 46.2  |     |
|            | リーダークラス | 49.9 | 52.8  | 43.1  |     |
| どんな友人グループか | 会員・サニクル | 22.3 | 21.9  | 23.2  |     |
|            | 会員・サニクル | 21.0 | 19.1  | 25.6  |     |
|            |         | 5.3  | 4.6   | 7.0   |     |

表IV-6 部やサークル

(%)

|            |                | 全 体  | 高 校 生 | 大 学 生 |
|------------|----------------|------|-------|-------|
| 部やサークルへの加入 | 1. 加入している      | 58.1 | 56.9  | 61.3  |
|            | 2. 加入していない     | 39.4 | 40.0  | 37.7  |
| サークルの種類    | 運動系            | 61.5 | 64.6  | 53.4  |
|            | 文化系            | 36.3 | 34.4  | 41.2  |
|            | その他            | 1.4  | 0.6   | 3.7   |
| 週の活動日数     | 1. 7~5日        | 52.9 | 61.2  | 31.4  |
|            | 2. 4~3日        | 14.3 | 12.1  | 19.8  |
|            | 3. 2~1日        | 15.4 | 10.7  | 27.7  |
|            | 4. 1日未満        | 5.0  | 3.8   | 8.1   |
|            | 5. ほとんど活動していない | 11.9 | 11.8  | 12.1  |
| 生活の中での比重   | 1. 生活のすべて      | 4.2  | 4.5   | 3.5   |
|            | 2. カなりの部分      | 35.9 | 35.3  | 37.6  |
|            | 3. 生活の一部       | 40.5 | 40.7  | 40.0  |
|            | 4. ほとんどかかわりない  | 19.2 | 19.4  | 18.7  |

図IV-3 若者文化のタイプとグループ・サークル

